

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和四十二年八月二十五日 印刷
昭和四十二年九月一日発行 (毎月一日発行)
(第二十四号)

川柳塔



No. 24

特集・須崎豆秋句集

九月号

夏の疲れはすぐ
おとり下さい

疲労・全身倦怠・食欲不振
神経痛・腰痛・肩こり・便秘
胃腸機能の減退・疲れ目など

高峰秀子



ハイベス
の治療効果

5
25
50



このマークの
薬局・薬店た
けて販売して
おります。

大阪市文化祭
第19回川柳大会

日時

十一月二十三日
午前十一時開場

会場

中央公会堂
(三階集会室)

兼題

「人形」

北川春巢選

「小説」

堀口塊人選

「地下街」

岡橋宣介選

「大阪いろいろ」

青木三碧選

「万国博」

片山雲雀選

兼題締切

十一月十日必着

席題二題

題と選者は当日
発表

宛先

大阪市北区中之島

大阪市教育
委員会内

大阪文化祭

川柳大会係

国立公園 奥新和歌浦

・雑賀崎



国際観光旅館

うおまた
魚又楼

TEL 和歌山 (44) 0431・1186(代)
大阪案内所 (641) 3 5 6 4

風光明媚な
海岸美を
誇る

陳情団の中なる俺の薄い胸

ものほしげ圧力団体の声でなし

憎しみの構えに笑顔卑屈なる

これっぽちの人世を押しのかくぐりぬけ

割り箸を拜んで棄てて旅終る

中島生々庵

今月のことば

◎掌でボンと前額をたたくとポイと名吟が湧き出る仕掛、昔風に言えば打ち出の小槌、現代では電子計算機、ボタンを押すと自動販売の乗車券のように、ポイ、ポイと名吟が出たら。苦吟を重ねる度に思うことがある。

◎しかし待てよ。自動車が欲しい。ハイ自動車。ダイヤが欲しい。ハイダイヤ。これでは世の中に銭の必要もないし、働く必要もない。無気力で退屈で、すべての意欲は消失して終って、恐らく最後のボタンが押し出すものは

自分の墓だったということになるだろう。

◎やっとなすがりついた宝の杖にも突きはなされ、幾度か賽の河原に石つみかさね、あわや絶望の淵に身を投じようとするその瞬間、パット閃めく尊い醍醐味、これなる哉である。

◎ボタン押したら赤ん坊のおむつが換えられる工風を真剣に考えたアメリカ女があったそう。川柳人は夢にもこんな馬鹿な女をまねてはならぬ。英国では老チエスター卿が一人でヨット世界一周をやったではないか。

川柳塔九月号

川柳塔 九月号 目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

今月のことばと句帖

中島生々庵……………(1)

川柳塔

(同人作品)

中島生々庵選……………(4)

★須崎豆秋句集

(ふるさと)

……………(20)

近詠

麻生霞乃……………(27)

句集「老いの坂」雑感

清水白柳……………(30)

秀句鑑賞

(前月号から)

後藤梅志……………(44)

川傍柳初篇研究

(五十一)

……………(18)

前田喜代人・岡崎重義・清博美・藤井和雄・
川端柳風・故高須啞三味・丸十府・岡田甫・

中国お化けばなし

東野大八……………(28)

★戦争と川柳

……(同人特集)……

奥谷弘朗……………(42)

盲目抄

高鷺亜鈍……………(27)

路郎忌に寄せて

葭間恵文……………(41)

近作柳樽

北川春巢選……………(32)

松江梅里追悼句会

岡橋宣介……………(56)

真実になし

海士天樹……………(59)

梅里脱出の遺句

菊沢小松園……………(46)

初步教室

……(薫風)……………(54)

★柳界展望

……(庸佑)……………(50)

★本社八月句会

……(文秋)……………(60)

★各地柳壇

……(文秋)……………(60)

一路集「波紋」

都倉求女選……………(48)

「リダー」

浜野奇童選……………(48)

「方角」

西森花村選……………(49)

★編集後記

白柳・三夫……………(64)



中島生々庵選

松江梅里逝く

梅里さん逢いたい人も居ただろに

有馬温泉にて（一句）

肌はまだ湯の香の残る膳に向き
楽屋出た素顔へ受ける部屋見舞
風鈴へ浴衣の袖を抜ける風
抜けぬけと旦那は旦那いろは色
想像にまかせ噂へさからわず

高槻市 若柳潮花

青森市 工藤甲吉

かたつむり雨けぶる日をデートする
珍しくなつたはたるへ子を起こし
靴の裏ガムわが家までついてくる
女房という心棒で保たれる

かかる世に義理をとうしてわらわれる

桂離宮

大阪市 正本水客

飛石のお水照りに負けていず
梢うごいて緑りの粉が水にふる
賞花亭峠の茶屋の風がなし
屋根と障子の調和が昨日も明日もある
簡素のなかに極端なぜいたくがある

岡山県 浜田久米雄

まつすぐにきようも歩いた陽が沈む
走馬燈歩いた過去に悔いがなし
まつすぐな脊骨天寿を全うし
東京の夜景に怖しぬほどに酔い
東京の夜の財布は妻が持ち

コラーサ二世号

大阪市 山川阿茶

精神一到嘘でなかつた二万キロ

W過剰の男にみせたいド根性

梅里さん(三句)

あの時の鰻が最後忘れず

ひとふんぱりしますと云うてはつたのに

淋しさは横綱の席空いたきり

高槻市 傍島静馬

日日好日老妻あくび嗜みころし

ババア抜き複雑に聞く嫂の耳

皆ものになれば凄かる子沢山

割勘にしてから酒がうまくなり

花の主そつとしておく交番所

加賀市 木村一路

入院雑感

何時迄も去なぬ見舞いへ胃が痛み

七転び八転び世間狭くなり

苦笑する事で見舞いの妻に敗け

面会の子を痛がらす無精髭

陽溜りに老爺の影の動かざる

大阪市 水谷竹莊

この夏を島で儲けるよしはずり

惚れてると一と言いわせ嬉しがり

値切るだけ値切り相談して来ます

ホルモンの効き目まじめに聞きにくる

松江梅里氏追悼

庖丁の友趣味の友今は亡し

岡山市 服部十九平

賞品は両手で受ける高でなし

正論を吐く青年ののど仏

稲妻を孕んで凄い夏の雲

退屈を言う青年の爪が伸び

出雲市 尼緑之助

子供つばい声で答えるインタビュ―

又飲んで帰る父の日と知らず

一円で飲めた話をくりかえし

西尾の髭と眼 委員長を去る

下関市 中村九呂平

一合をこうまで味をかえる妻

得心の酒なら愚痴も云うて酌ぎ

くつろいだゆかたが甘い声になり

頭からガンと叱つて妥協する

大阪市 後藤梅志

雷が聞いて居たのか一つ鳴り
阿倍野橋またぐ橋にも乞食いる

明治回顧

男ぎらいが手古舞いに出る
かき氷ラムネの玉のはじく音

大阪市 大坂形水

クーラーの野暮川風の窓を閉め
わが家にも一とこ風の通る部屋
如才ない市会議員が居る夏祭
断われぬ顔立てて置く顧問料

豊中市 戸田古方

倅の倅でつかい福耳して生まれ
立派な仏さんやなあと拝んでず
恐ろしいベースのみだれハツとする
ナポリの下町みたいズボン釣りをして

大阪市 市場没食子

女見たいな男が株をいじり出し
正直に働き按摩賃が要り
聞く方に廻れば父のもういびき
聞き上手に話上手がまた吞まれ

西宮市 若林草右

叙勲の光栄に浴して

悠々自適してはすまない今日の栄
百科辞典叙勲の朝にそつと見る
まだ生きてますかと年金きいてくる
生けるしるしの抄本とはさびしけり

大阪市 西出一栄

梅里師と急去(一句)

受話器疑い耳を換えて聞く計報
謎のよなせりふ残した子を案じ
あれば飲み無ければそれで済む夫
曼珠沙華なんぼ燃えても片思い

藤井寺市 西いわを

格子戸の中で質屋の青白し
絹漉でふるつたような人選び
ご近所に空家が出来て分家さす
摺足で廊下を長いものにする

明石市 家沢薺花

大鵬の馬鹿馬鹿と呼びあきらめる
人の手をのがれた蔵親となり
食うために象基盤乗り見てもらい
かじか鳴く小川で鯢と足洗う

大阪市 石倉旅風

毒舌の口をつぐめば笑顔好し

ひまわりの孤高にそそぐ陽の苛烈
帰つても耳が鳴つてゐる八瀬の蟬
裏側を見せた孔雀の勘違い

大阪市 本多柳志

賢兄も愚弟もおらずうまが合い
濁流に吞まれ視察に又飲まれ

旅へ来て

伍ビール湖はもう夏の色

まだやまぬ雨を聞いている宿浴衣

大阪市 金井文秋

ライバルと思うてますとおだてられ

凡人に夢が広がる金と暇

大物でない顔色がもう変り

硬貨だけが銭とおもてる販売機

姫路市 隠岐不酔

真実を言えば税吏はにが笑ひ

泳がないおやし着物の番にされ

親指が素通りさせぬパチンコ屋

叩かれりや死ぬるわいなと蠅は逃げ

豊中市 寺田花宵

バスガイドこちらが名残惜しくなり

肩書の多い名刺に用も無く

素晴らしやこころを叩く俄か雨
夕立が晴れてどわすれ思い出し

東大阪市 久米奈良子

愚問きく余裕へテンボくずさない
業ふかき女の性と知る涙

抜きえもん孤独のかげを匂わせる

切り札へ愛の終りを匂わせて

大阪市 福井野迷路

大戦の毎に近眼だけ残り

蝶は花蚊は水溜りへ里帰り

狭くとも飢えても悠々熱帯魚

爛番が板につき過ぎ寝て終ひ

諫早市 大崎筆染

母の手を夫にかえて締まる帯

土性骨凶のみくじも気にならず

義理堅く生きて余生にあるゆとり

どん底におちて神までそっぽむき

岡山市 長谷川紫光

その嘘を黙つて聞いている内助

ガイドの名メモして楽しい旅終る

夫婦仲良いというから良いとする

初物の鮎骨抜きは子に任せ

美禰市 安平次弘道

レース糸もつれ気短かだなとわかり
さざえのつば焼残忍さを忘れ

貧相で家具屋は安いのをすすめ
最低のくらしもアンテナだけは立て

岡山県 浜野奇童

現実にくれば会議そつぽ向き

小児病棟出て現実に戻される

家内中濡れて帰った共稼ぎ

倒産をしたとは母校知りはらず

加賀市 那谷光郎

見合いなど退屈だワとアイシヤドウ

夕飯はすませて来たとは嘘らしい

アリの列かつぐみ興は虫の羽

歌麿の絵になる湯上り爪を切り

大阪市 天正千梢

やりばない心の整理墨をすり

ブーム呼んでもとも知らず石しずか

萩の葉も眠むり法則にさからわず

雨の夜も庭園灯は気分出し

竹原市 小島蘭幸

髭を剃りなさいと彼女言うてくれ

夫婦とも同じ事を拝んどり
割勘で行こやと給料前になり
路郎忌へ根性のある顔ばかり

大阪市 不二田一三夫

徹夜した目が魅力だと云うてくれ

寄席(三句)

夫婦喧嘩高座をおりてやり直し

辛らつな批評は客席からアクビ

中継のお色気抜きがやりづらく

室戸市 奴田原紅雨

髭剃つてみてもしとしと降りつづき

らつきようで飲む父の日の父達者

雑草のどつこい屋根に生きている

岡山県 田村藤波

大ばらを吐いてお先に左様なら

島の娘の素朴を高く評価され

残月を踏むマージャンに負けた足

鳥取市 河村日満

山中温泉にて(三句)

温泉の街のいずこ変らぬ夜の膳

涙雨ですと女中のいい愛想

つつじ咲く庭山中は湯にかすむ

島根県 藤井明朗

人口過疎ふる里は細くなりほそくなり

母ちゃんの帰えり待つてるすべり台

行末は楽し有料養老院

岸和田市 内藤きさ子

戦時中のことを思えとまづい味

卑屈ではなし本当に低い腰

もう一度叩かれ蠅は観念し

★前号訂正―世のある家涼しげにみえて夏

名古屋市中区 吉田水車

それみんなお前の歯かとうたがわれ

駄々つ子のように監督サイン出し

雑きんのような毛なみを連れ歩き

門真市 福島鉄児

積み残す客へともに排気ガス

生きて居ることが退儀な程疲れ

晴耕雨読実は退屈してまんねん

下関市 桜川不水

夏茶摘みまだ露ありし指さわり

トマト胡瓜リンゴと仲のよいサラダ

黙々と我が道をゆく山の芋

倉敷市 本田恵二朗

世界地図ベトナム附近焼けただれ
若い美をこてこてと塗りつぶし
声帯もほどよく渋り五十過ぎ

尼崎市 長谷川三司

枕抱いて男五十の春愁し

だしぬけに來てその晩に立つと云う

聖書手にきょうもベンチに職がなし

岡山県 直原七面山

目に温かき牡丹雪

衣裳くらべも恋の鞆あて

猫が聞いてる二号の爪弾き

倉敷市 木村千容

赤松を県の木に指定

赤松の肌美しき林かな

若朽の働く意欲でんでなき

バランスの崩れた娘の高笑い

京都府 大鶴喜由

紳士用の文字につられてうかと買い

原爆の記念日近し赤トンボ

さびしさは本氣に見せて嘘を云い

神戸市 仲どんたく

うちでこれ潰けましたのよが何よりの

マンシヨンの附近は蛙鳴くところ
この空間僕達のもの家が建ち

竹原市 杉原愛鳩

恩給がついて女のふしあわせ

生甲斐をドツシり重い肩車

鮎釣つてかえる団地の自家用車

小松市 関戸宗太郎

釜ヶ崎たまに荒れねば気が晴れず

一泊へ妻の望みが盛りきれず

栗田につながりそうもなくちびり

伊丹市 小川静観堂

孤独は孤独なりに僕たのし

総入歯にしようかすまいか顔の皺

僕のヘソ子供のときから同じ型

岡山市 江国幽谷

世界中の雲を集めたように降り

安物の金魚ばかりが御健在

本当の値段が判らぬ程にまけ

今治市 越智一水

もろた花またわけている立話

出かせぎの軒に真赤なとうがらし

あたたかい掌だつた再婚するとき

兵庫県 遠山可住

十票程握つてゐると身構える
だしぬけに蛙が鳴いて雲走る
もうちよつとの辺を運命回つてゐる

鳥取県 清水一保

水不足故に太陽まで恨み

戸締りが良過ぎてつばめ困惑し

馬鹿になる智恵までつけて呉れた恩

堺市 高崎雄声

安楽に死なしてほしい仏さま

満開を人も蝶々も見逃がさず

踏まれたタンポポ痛かないかと撫でてやり

大阪市 河井庸佑

のらりくらり逃げて会議をおさめる気

手の速い父へ子供は身構える

山びこのような男で頼りなく

ハワイ 羽佐間柳葉

鼻声に頑固だんだん軟化する

恨みでもあるよにレスラー掴み合う

運動会母の視線は子と駆ける

諫早市 川岡霊眼子

人格は云いたし金は儲けたし

つままれることの証拠を爛徳利

また詐欺にかかるような金を持ち

香川県 三井 醉夢

運命に逆う舵も疲れはて

角とれた丸さだろうか嘘をつく

燃える日もなくて妻の座つつがなし

笠岡市 木山 遠二

老の日記妻のあけくれをもしるし

赤い字が嫌で家計簿やめにする

ベレー帽かむり雅号が板につき

竹原市 山内 静水

倅せをしみじみ思う熱海の灯

美保の松原大根足の妻でよし

そつと手が重り合うも旅なれや

岡山県 横山 一声

居眠りをよくする妻でよく太り

小食ですのと上品そうに言い

水不足恵みの雨で被害が出

熊本県 有働 芳仙

見て見ない振りも大事な社交術

よう来たねさあ上がれとは云わず

お日様を拝む角度にビルが建ち

愛媛県 渡辺 暁童

当用漢字になくとも切瑳琢磨なり

朝湯朝酒先祖のくらし思いつつ

腹たてることも忘れて尾をふつて

愛媛県 村上 旭童

豪雨(二句)

堤防が向うへきれてはつとする

濁流へ土のう空しくつきこまれ

這いはいは鉦見つけた早さなり

京都市 松川 杜的

桂離宮

年を経た木目に王朝の影があり

燈籠の構図へ雪を置いてみる

黒ずんだ緑になつて流の口

岡山県 池田 古心

子の手術廊下お百度踏むように

外孫に頭叩かす愚にかえり

墓だけが先祖の古さ物語り

岡山県 藤原 秋月

出入り口みな知つていた逮捕状

刺青がようやく隠れる衣更え

難関もあり生き甲斐を感じる日

大阪府 今西 章雅

前衛書道あの字で手紙着くだろうか

事故一つなかった廃車に吞ませたい

芦屋市 丸川 初甫

横取りをされて怨の百度石

腹立ちの辞表が書けてうらやまれ

大げさに女証拠を見せたがり

大阪市 児島与呂志

子沢山梅雨の晴間を又洗ひ

思いやりガンと云う文字秘めてやり

民主々義にくまれ口まで教えられ

平田市 久家代仕男

酔うている癖に四角な御挨拶

舌打ちはふぐが続けて釣れた竿

こぼれ餌を拾ひ魚師の子釣つて見せ

大阪市 故木村十悟

遺句

意地悪な看護婦さんがおもしろい

居て貰う居らして貰う良い主従

寝ててやと老人留守をたのまれる

富田林市 川端東雲楼

春夏秋冬枝垂れ柳は風まかせ

バスガール襟にブライドもつ白さ

お淋しうございましょうとは他人さん

奈良市 村上春巳

アルバムの父とおんなじとこで撮り

大仏殿雀は点となつて消え

親鹿の目が8ミリを睨みつけ

守口市 羽原静歩

起されて今日も七人敵が居り

金風呂の二分のんびり出来もせず

命綱積乱雲が見てござる

ハワイ 築山快夢起

血と汗と涙を深い皺に見る

さあますの膝を天下のベルシヤ猫

当選は確実という顔ばかり

鳥取県 森田布堂

消毒の霧にも虹の美しく

母の瞳に笑顔うつして子がはしやぎ

利殖表百年先のアホらしさ

大阪市 礪弓彦

勤めから今日の暑さを持ち帰り

打水に西瓜の種も入つていた

特別と百円多い賞与なり

兵庫県 大江秋月

退院の日も大安を選つて母

もう水が要らぬというに今日も雨

引越しの度に大きくなつた犬

熊本市 楠田英子

初恋を頭痛のさなかに不図想ひ

犬の病氣我が家の日課変つてき

母にだけばつてんをつこう子になつて

新居浜市 近藤凡生

てるてる坊主落目な俺に雨続く

死とは何か失職の日の物想い

鏡ふく其の隅にある自尊心

奈良市 宮口笛生

甲斐性ない夫で安心してゐます

ゆつくり寝よと日曜雨が降り

Y談の中へ保険の女来る

松江市 中川晃男

消ゴムで消しても悔が残る跡

風呂の子を洗えば痛いところばかり

インスタントばかり男の市場籠

兵庫県 河原みのる

これとアレだけは云わずに死んでいこ

生命保険いつそ死んだらかと思ひ

陰があるので右側を行く

笠岡市 松本忠三

真直に歩いた積り靴のチビ

仏壇の桃を腐らぬうちに食べ

週刊誌の表紙新聞紙でかくし

倉敷市 水粉千翁

来て見れば聞きしに勝るとは言えず

寡婦の座の勝利者として白髪梳く
杖ついてなるか見てくれ九段坂

新居浜市 小林孝正

女一人生きる打算と氣にとめず

忘れようとして庖丁の音しきり

だまされてからの半生嘘で生き

奈良県 草深醉升

政策のヒズミとやらで泣かされる

十日ほど来ぬ野良猫が氣にかかり

いつくるか判らぬバスを待つ暑さ

鳥取市 藤本礎山

戸締りを夫婦で開けるよい旅行

倅せは私を頼る妻が居る

三代目先代からの錠をかけ

宇部市 平田実男

値上りへ首相夫人もチト怒り

雨乞いをしたその雨に泣かされる

早乙女の尻がアヒルの型で揺れ

大阪市 宮尾あいき

梅雨晴を信じきれない傘を持ち

もやもやを孫の笑顔へ流しに来

お別れもしんみり出来ぬ人の数

松江市 柳楽鶴丸

十人十色他人の恋を笑うまい

洗濯物どつさり俵せな日々すこし

時計よせかないで僕をゆつくりねせてくれ

笠岡市 木山 要次

反省の瞳をとじる肘枕

道を問うだけにも人を撰り好み

良妻賢母働き抜いてきた寝顔

和歌山市 西尾 公作

一滴の雨に予報の義理が立ち

受け入れる愛はもあいの傘となる

七夕を流す程よき雨の川

和歌山市 野村 太茂津

雨を乞い雨をけなして花作り

日曜大工その監督が妻の役

左右前後上下注意工事中

大阪市 室谷 鉄舟

退院の足へ陽炎まといつく

麦秋のござ一枚が子の世界

ミニスカート視線を意識してすばめ

大阪市 中川 滋雀

市長には祝われ家では邪魔がられ

会うてから話すと長い赤電話

梅里さん逝く

あつけない寿命明日を考える

倉敷市 井上 旭峯

素人は苦心の作と見てくれず

すつ裸これから生きてゆく産湯

駐在が薄給さいて悟す冬

ハワイ 加川 カロ女

自信作出して発表日のながさ

年輪に物を言わせた腕の冴え

神代から思案は首をたれるもの

大阪市 西川 誓二

たそがれを牛シルエツトで野良帰る

ゼスチュアを交えて電話まだ続き

紅落しやつと人の子の母になり

岸和田市 葛城 伊三郎

水替えりや金魚逆立ちして泳ぎ

転々として結局は郷に入り

淵一杯波紋拡げて蛙消え

倉吉市 奥谷 弘朗

末つ子の甘さが五十にして残り

ステテコでスーパーマでは行ける夏

富田林市 岩田 美代

耳打ちを胸におさめて米をとぐ

反応を示さぬふるまい演技めき

高槻市 山田季賛

坐るところへ坐り意見をきいて見る
算盤はゆつくりすればちゃんとき合

岡山県 大森娛句楽

早苗採る水穂の国の榊掛け

名犬の孫ともなれば野良で生き

奈良県 西辻竹青

雲ゆきがどうのこうのと水キキ

洗濯物干してもめてる水キキ

京都市 都倉求女

早く寝よ寝よと扇風機首を振る

お飾りの屏風の陰で牌の音

高石市 谷沢好祐

ゴミを見てゴミ屋はわかる暮し向き
もつたないもつたないで嫌われる

倉敷市 野田素身郎

PTAガヤガヤガヤと会終る

冬の月賦が夏まで続くあほらしさ

ハワイ 上田紅溪

旅の宿アンダパンスをチャに乾し

金儲やつぱり元がかかるなり

東大阪市 本多清人

それぞれにねぐら持つてるターミナル

母が居てまだ煙突のいるかまど

松江市 岡崎祥月

どうしてくれるかと旅行案内所

貧血をせめる藪蚊がにくらしい

京都府 清水谷句楽坊

梅里先生の計報に

臉とし影絵の君へ経を読む

君の計はあすの私の告知板

宝塚市 小島無聖

愛なきに馴れて独りの部屋に臥す

バカバカしい浮世と言つて捨てがたく

大阪市 川口弘生

学校に母の座のありPTA

お風呂屋が近いも新居の自慢なり

泉佐野市 大工睦夫

白鷺に尻追われつつ田が植わり

捌め手も迂闊ナセルの人頼み

和歌山市 土谷城石

身に合わぬ浴衣平気で旅の夜

直すより買う方が徳やおまへんか

大阪市 宮地双楽

姉さんのお下りを着て夏まつり

締め切りに自信の作が乗りおくれ

大阪市 賀本 昇
出戻りに悪知恵つけているマダム
子沢山金のなる木を夢に見る

福井市 大山 雅城
行水をするにもアパートの端はよい
ひび割れて一つが残り九谷焼

泉大津市 高津 徹也
あたためていた話を聞かす子に育ち
単調な柄が涼しい夕涼み

大阪市 森本 良夫
電話ではまんざらでない妻の声
衣替え去年のままの体知る

守口市 村田 瓢太
半袖を着てもネクタイだけは締め
じんわりとすねて承知をさせる腹

福岡県 太田 湖平
溜め水で田植を了えて夜半の雨
慈雨の池蛙の仲溺れたり

普通寺市 岡田 拳法
海開きだぞと雷鳴一しきり
不心得療舎忍者のように抜け

新居浜市 安藤 桂仙
喰いつめて人の善意が汲み取れず

自己紹介めんどくさそに立ちあがり

八代市 永松 道雄
齒車を替えて水車の良く稼ぎ
信念は曲げぬと裏で舌を出し

出雲市 原 独仙
照れば乞い降ればおむつが乾かない
つり皮の女の素肌に触れて揺れ

富田林市 浅川 八郎
全身で哭いても娘は十五
外科の看護婦花も活けると言う

大阪市 福井多蘭子
禪堂に気配でひとり居ると知る
持参金で病院建てる腹で居り

和歌山市 二越 俊爾
大都会人情路地の奥に逃げ
動けなくなつては遅いヘソクリだ

加賀市 細呂木 魯木
七夕はプラネタリウムですましとき
日本の横顔見たり上野駅

呉市 林野 甦光
赤旗に公園附近陣取られ
地すべりの附近で雨の夜を寝せず

兵庫県 磯野 与志

遭難の附近は今日も霧に消え
御神火の附近は馬の背にゆられ

笠岡市 蔵本白梅子

この附近昔は花の里で知れ
盛り場の附近うろつく反抗期

★ 西尾 栞

バックさす笛を環視の中で吹き
孫のおいどたたいてこつちがねてしまい

中元歳暮義理人情のお国柄

背泳へ入道雲は足の先

聴診器一句案じているとは知らず

病院長拜命 (三句)

北川 春巢

院長室雑音のない淋しさよ
のぼりつめたが絶景とて見え
病人のホテルの亭主やと思ひ

転居 (二句)

引越して鉄筋長屋それもよし
3DKの狭さの中へ花を分け

若本 多久志

貧困な政治へ豪雨つづけさま
始末書は取り引き出しの底に入れ
悪筆の最たる順も社長なり

落ちつけ落ちつけ税務署のドアを押す
吾足るを知らず石庭の縁に座す

菊沢 小松園

雑草の他人の指は気にせず

ああ云えばこう云う子供になつて戻り

警察で鞆抛り出して親を呪う

寝るだけに若い夫婦の身づくろい

女とは悲しき性よ手をつかえ

清水 白柳

電気あんま電気蚊とり器僕の夏

悪筆はかなしきものよ白い紙

句箋など飛ばしてしまえ扇風機

カーテンはレースはだかで子を寝かせ

青筋を立てて無口で居る弱味

川村 好郎

梅里急逝

永久のさよならだつた戎橋

お供えのちくまのそばも見てるだけ

こう生きて死ねと威張つている遺影

さびしさは梅里と呼称のない句会

及ばずともあと継ぐ兄をご覧あれ

川傍柳 初篇研究

(五十一)

前田喜代人 川端柳風

岡崎重義 高須唾三味

清博美丸十府

藤井和雄 岡田甫

481 はたを織りかけて野掛へ火をはさみ

五 扇

清||はたを織っていたのは田舎の娘か、そこへ野掛の連中が火を借りに来たので、かまどの下に燃えている薪を一本はさみ出してやる。「火をかりに寄れば田舎は壺本出し」(七・20)「娘の火かりて野がけのやかましき」(明六桜2)

藤井||例句によって昔の野掛風景が見えるようだ。今時の学生達なら水筒の水貰いに農家に寄り「今のメッチェン素敵だぜ」という所。この娘さん黙って「火をはさみ」で田舎娘らしい素朴さが好感をもてる。佳句。

川端||賛。野掛のときは飲食物を用意したが「野掛道家を探して火をかりる」(籠三・27)と煙草の火には困ったらしい。高須||「うつ木など切って火縄をまきつ

ける」(傍一・5)。用意を怠って出た野掛けである。

前田||諸説に賛。女のお色気にふれる。丸||賛。織っている機からおりて火をかす実直な田舎女の情態。

岡田||同。娘でもいいが農家のおかみさんでもよからう。ただ、いかにも野掛け(ハイキング)らしい感じを点出しているところを味あえは足りる。

榎を飛びこすと娘に化ける 泉河

清||榎は、一里塚標木としての榎である。松ヶ岡へ走る嫁を詠んだ句としてみたが。

藤井||この榎は板橋の縁切り榎のこと。

川柳大辞典によると、板橋の少し先で岩坂という所に在る。『十方庵遊歴雜記に「寛保年間、磯の宮御下向遊はし此街道を通御し給ひ城内に入らせ給ひしに幾程もなく逝

去まし、その後又、寛延、宝暦の頃にや波の宮御下向遊はし此街道を通御ありしに是又幾程もなく逝去し給ひしかば、それより誰いふとなくこの木をにくみて、縁切榎と異名せしより巷談を伝へ、世人又聞きて今は異名の如くなりぬ」という。それからあらぬか其の後、文化六年に來の宮、文久元年に和の宮が御下降あった際も道筋を変えて日光街道から入城遊ばされたという。民間ではこの榎の皮を削り、水または酒にませて相手に飲ませると必らず縁が切れると信じられ、奉納の小絵馬なども榎にかけられてある。」

板橋の榎出る気になるきなり(七五・36)

板橋の榎を女房心つき (一二一・7)

従って板橋の縁切榎に参詣すると、そのききめによって離婚成就して元の娘になれた。榎は清説の如く、一里榎の標木だから、

ここでは板橋への旅を「飛びこす」と表現
も板橋の縁切榎のゴールにとび込むと、又
娘になれたとの意。

高須 板橋の榎は今もある（但し三代目
という）東京都板橋区本町三二であるが、
「榎の木で連理の枝をさき」「板橋の
木皮の能は医書にもれ」「生木さく願は榎
の皮をむき」等々詠まれている。それで再
度娘に化けられたのであるが、縁が切れる
点で松ヶ岡と似た点がある、古来この二つ
はよく並んで川柳になっている。

榎でもといけぬ去り状を松で切り（二八・四）
榎でもといけぬ去り状を松で切り

（三二・38）

この句は、既出「十三本とうとう榎嫁は越
し」と違つて松ヶ岡の必然性がないから藤
井説であらう。

丸 藤井説詳細なれど納得できず。小生
は二十軒茶屋と解す。榎は伝法院前の榎。
「一里塚先きに美人が二十人」二十軒茶屋
の茶汲女は、踊子のように年増娘ばかりで
はなかった。本当の娘もあつたがそこは商
売女房の化けた娘や子持ちもあつたのだ。

岡田 松ヶ岡の駆け込み女の一里塚の
榎、板橋の縁切り榎、それに浅草境内の榎
と三本とび出したから、小生も負けずにも
う一本の榎を提出する。それは王子の装束
榎である。この榎のところは年末には関東
の狐が集まるという伝説が江戸時代に横行

した。とにかく王子は狐の名所で、装束榎
をピョンと飛びこすと思ひ狐がきれいな娘
に化ける……という解も成り立たぬことは
なからう。とにかく本句は今まで定説がな
い難句の一つだが「飛び越す」の表現から
すると、縁切り榎と浅草の榎はムリで、む
しろ急いでいる駆け込み女の松ヶ岡の方が
強いかと思う。「化ける」を強く見ると王
子の狐が一番強い。だが、やはりそのどち
らが正しいか、決定的な断案は下されな
い。松ヶ岡か王子の狐か、それは解する人
の見方におまかせするより仕方のない句の
ようだ。

丸 王子の装束榎。なるほど。

483 芳兵衛といふそなのを後家ハ買

用 弓

清 日本橋芳町の陰間茶屋を詠んだ句。

本論議に初めて登場するため少々詳しく記
述する。「男色楼（かげまぢや）」、芳町
を第一として——三、四十年前は芳町に
百人余もありけるよし。この内より芝居へ
出て歌舞するを舞台子といひ、又色子とも
称して四、五十人もあり、この色子ども末
には皆役者になれり。女形は多分此者ども
より出来て、上手といふ地位にいたりしも
多く有けるよしなり——此節銜艶（かげま）

芳町に十四、五人、湯島に十人計も有よし
を聞けり。宝暦の頃と違ひ減少せし事に
て、男色衰へたりと見へたり」（『塵塚談』
文化十一年）とあるように、舞台子で十四

五から十七、八才ぐらいまでの者が陰間と
称して男色を行なつてゐた。しかし身体が
成長してたくましくなつてくると男色の相
手としては不向きになつてくる。そこで「
又江戸かげま茶屋は出合と云ふて男女会合
の所とす。聊か酒を出して席料一分也」
（『守貞漫稿』二十編）というようにこの
陰間は、後家や奥女中なども客とした。主
題句も、この年をとつた陰間を買つた後家
を詠んでいるのだが、芳兵衛は芳町をもじ
つた擬人名である。「芳町は化けさうなの
を後家へ出し」（三三・21）「髭をくいそらし
て陰間後家へ出る」（二三・13）「芳町は坊
様ござれ後家ござれ」（安四智）

高須 芳兵衛は芳町の擬人名には違ひな
いが、その「兵衛」名のは親代々名のる
名で、この名を名のる頃は息子も立派な当
主になつてゐるのを利かして、相当な男の
意で後家買ひが成り立つわけである。既出
「十八ぐらゐの鬼では後家たらず」である
丸 賛。高須説の如く「芳兵衛」から受
ける感じは一人前の堂々たる男だ——言い
得て巧みである。

岡田 同。

麻生路郎著

新川柳鑑賞

定価 二五〇円
送料 一二〇円

橋高薫風著

れもん

送料共 五〇〇円



故 須崎豆秋氏

豆秋氏の遺書

もうあかんと覚悟したので
「わかれの言葉」を書きのこします。

あんたはんは、私のわがまま生活で長い
間苦勞をかけて、何一つ楽な目をささず、
一生のどたん場になって思いもよらぬ大病
にかかり、あんたはんが寢食をわすれての
介抱をしてくれたことを心の底から感謝し
ながら、一足お先きへ失礼いたします。

あんたはんは、遺族年金その他で貧しい
ながらも暮らして行けますから高鴨さんへ
お願いして、この町内（こないい町内は
ありません）でおらししていただき健康に注
意して達者で長生きして下さい。

たいへんお世話になったこと幾重にも感
謝しておわかれいたします。

妻へ
さようなら

清次

須崎豆秋句集

この遺書の一部が朝日新聞に掲載された。

「日本の年輪」——川柳——

遺書という暗さはまるで無い。語りとも文
ともいえぬその表現の流れ、転調のあざやか
さ、私はそこに、川柳を知る手がかりのよう
なものであると思った。（馬場博治記者）

「川柳雑誌」36年1月号

須崎 豆秋

退院（二句）

退院をする逃げ足の速いこと
狭くともわが家障子に陽が当り
酒吞めぬ死に損ないのお元日

36年2月号

十二月一万円札がクシャになり
十二月電車やバスが待ち切れず

36年3月号

夜もすがら達者であつた頃の夢

柳塚の「茶」といわれた、豆秋氏の「ふるさと」を読みたいとい
う人がふえた。
柳塚の月でもあり、故人をしのぶよすがとして、豆秋句集
「ふるさと」を特集した。

餅一つ食べてもならぬ寝正月
惜しみなき命檜山行の歳

暮れてゆく如き往生したいもの
ニコヨンにさえボーナスがあるものを
36年4月号

食べることはかりに溺れ瘠せはそり
遺言を書いて心が楽になり

36年5月号（川柳塔最後の句）

歯車の一つ缺けるとお陀仏か
同病の死を黒梓に見る寒さ

お水取りすめば癒ると思ひ込み
癌かいなハハーンと思う見舞客
それとなく生きてるうちの形見わけ

豆秋の事ども

麻生路郎

豆秋君が五月四日の未明に亡くなった。

——中略。投句十句のうち、三句まで癌の句があつたが、私は三句とも没にした。それを活字にしてまで読ませたくなかつた。

―遺書は亡くなった五月四日の午後二時半に私の手許に届いた。

先生の御健康御長命を祈り上げつつお先きへ失礼いたします。

生前は川柳のおかげで、明るい人生を送らしていただいたことを厚く感謝致します。

(私の机の抽斗に「川柳日誌」というのが四冊と外に一冊あります。これに私の創作吟、句会吟等の全作品を収めてあります。本社で保管していただければ心残りがないと存じます)

蔑乃奥さん、柳友のみなさんへ何卒よろしく。

月 日

須崎 豆 秋

麻生路郎先生膝下

―この遺書にある「川柳日誌」の四冊は彼が作句生活に入った昭和三年から、昭和三十六年の四月までの作品集であり、その句の発表誌や選者までのたんねんにしてある。―彼は中学時代を養家先に送り、その頃文学青年になって短歌なども作っていたらしい。一年志願兵で入隊した頃、既に彼の飄逸な性格が首を抬げていたことは彼の雑筆からもうかがうことが出来る。(川雜・36年6月号)

豆秋を悼む(二句)

麻 生 路 郎

死を知って楽しく遺書を書いたらし

豆秋が隅に来てそな悼む会

(川雜・36年6月号・不朽洞句帖から)

豆秋さんを悼む

麻 生 蔑 乃

午後のお便だった一通それは遺書

抽斗の中もかたづけ死出の旅

句会へも又出る君と思いにしに

河豚食うて別れを告げに来たも君

君こそは庶民の中に立つ詩人

隠し芸音痴の機智も働かせ

中 島 生 々 庵

豆秋君を悼む

大手術後一週間位の頃を見計って不朽洞会

を代表して梅里副理事長とお見舞に行った。

相当に思い切った大手術と時期的に少々手遅

れの感があった。病院の枕元に手帳と鉛筆を

置いて句を記しておられるのも豆秋さんらし

かった。

小 野 十 三 郎

豆秋さんは立派な詩人だった

川柳には不案内な私にも、庶民の詩人とし

て豆秋さんには、かねてから深い親しみを感

じ、敬愛しておりました。―中略―

死に面したとき、豆秋さんのように、この

ようにしようたる態度がとれるかどうか

すこぶるあやしいものです。ほんとうに立派

な詩人であったと思います。

(川雜・36年7月号)

川雜阿倍野支部のみなさん

お袂いたします。(遺書)

―生前の御交誼を厚く感謝しながら、朗らか

な気持ちで川柳往生をいたします。

(私の川柳に関する蔵書全部「貧弱なもん

ですが」を支部へ寄贈しますから皆さんで

お配け願います)

それでは阿倍野支部の発展を祈りつつ、お

先きへ失礼いたします。

同人のみなさんへよろしく、さようなら。

月 日

須崎 豆 秋

金井文秋様

遺書へ合掌

不二田 一三夫

遺書は奥さんから、会社の津村社長、川柳

関係、町内の人々にまで鉛筆で別れの言葉を

書きのこされたのである。

その最後には出生地の香川県坂出市から終

焉(えん)の地となった阿倍野区旭町、そし

て墓まで淡々と書かれてあった。

―後略。豆秋須崎清次氏は明治二十五年九月

十日生まれ、とら未亡人は明治二十三年九月

二十日生まれだから、二十九年上の姉さま奥さ

んであったわけである。六十九歳の豆秋氏は

壬辰で、とら未亡人は庚寅だった。天と地の

竜虎のご夫婦だが、しかしなかなか優しい円

満なご夫婦仲だった。

―感心したことは、相当長文の遺書なのに、

ただの一字も、誤字、脱字のなかったことで

(川雜・36年6月号)

みの虫のなんぼ匍うても壁だつた
出勤へヒヨコがすこしついて来る
どの草も草も見給え実を結び
口髭を生やして猫の子が生れ
落第へさくらの花が咲いたとて
恐ろしい風だつたと雀しやべり合ひ
骨立てたまま二次会へついて行き
家鴨の子泥鰌の太いのにあわて
春板の裏で茄子の花が咲き
ふるさとの螢が夢の中をとび
海へまで流れて蛙あわてたり
降りる客いとんのんと続くなり
行くあてもなく傘をひろげし
田舎道お地藏さんに首が無い
手ぶらでは鹿も相手にしてくれず
守り札もろともチボにとられたり
狂人の目に間の抜けたやつばかり
おお青空よ仕事が無いのに
街の子よ気がつくまいが屋の月
ほろりつとする名文で金を借り
いわしいわしなすびなすびの

日がつづき

阿呆なこと云うてしもうて淋しけれ
古池へ狸が砂を投げた音
一生の小骨を箸でよりわけろ
ふところにお金があつてよくしやべり
口髭を生やしていても叱られる
写真班もめてくるのを待つている
薄情を聖天さまへ告げにゆく
ではちんへ蠅はわざわざ来てとまり
文学にかぶれて死んだことにされ
ノーパンでいたらいつぞ涼しかろ
三十でつるりと禿げてきた悲劇
ああ大空生れては死に生れては死に
長靴の中で一びき蚊が暮し
藪医者なのなのとばやきながら死に
記念品もろてきれいな首になり
手を振つて見ても手ブラは淋しすぎ
たのしみに満つ湯豆腐がうごき出し
くくられて刑事と話しながらゆく
寒いとこよつて乞食の子は座り
気ちがいを真似てびつくりさしたるか
病人へみんなたかつて嘘を言い
面憎いほど姜宅がならんでる

初恋をして学校があほらしく
白骨ともならば涼しからん
フグばかり釣れて夕べの波となり
のつそりと外国人に追い越され
お祈りの声がだんだんヒスになり
幼へ春の蚊一つ横切れり
エスカレーター旦那のあとを
おつかける
千日前仁義を交わす夜の底
大風を刑務所だけが知らなんだ
借金の高も流石は名士なり
交番の留守へこんにちはこんにちは
雪チラリチラリなまこはいらんかな
質入れに行く人もあり戎橋
火葬場は火をつけてから夕涼
桃の字が思い出せずにおかしけれ
児が追へば鳩は歩いて逃げるなり
中ノ島身の振り方へ蟹が匍う
洋館へ先祖の槍の置きどころ
極道の傘もささずに帰つて来
ゑらい人の朝日一本だけもらい
啞の子の話術ペロリと舌を出し

いやらしいことが聞える交換手
屋の月なんば新地で引つばられ

大風水害

大毎も止まり豆腐屋もとまり
一生の幕ぎれヨイヨイになり
直角に質屋の中へ折れ込んだ
ドロドロと貧民窟へ陽が落ちる
二日酔まさかヤイトもすえられず
寒鮎は身もちのままで煮つめられ
銀行の窓へ大きなお辞儀をし
問題になる雨傘を借りてくる
老夫婦お経の文句行きづまり
金が欲しい欲しいと聴診器へひびき
ドア開けてえらい人から順に降り
貧しさを猫の顔して笑ろて見た

愛犬ボス

けなげにも家主の犬を噛んで来た
駅からはパパに抱かれて帰るなり
友あり金借りに来て以来来ず
名園に小舟が一つ腐りかけ
ヒゲのある衛生掃除人夫来る
ピヨイピヨイとうなぎを大中小にわけ

はしご酒大阪中が寝しづまり

三越の窓へ蝙蝠つきあたり

最初にはほんとに呑めぬように云い
むかしむかし稼げば楽になりしとか
葬式で会いばろいことおまへんか

腕時計見い見い仏説阿弥陀経

橋筋は春の匂ひのこうこ巻

桜見にゆく機関車は二つつけ

上品に貧民窟を見て廻り

エキストラパスを一枚づつもらい

ストツプがわからんのかと

怒こりゃはり

癒つたか死んだか神へ云つて来ず

新緑は木魚の音がするばかり

二、二六事件

年寄の寝ごみを襲う戦術か

鼻欠けたまま国宝に指定され

タンタンタンタンタン瀬戸内海は

鯛をつり

お彼岸を乞食の犬も坐らされ

夕飯に坐つて父の顔になり

速よいかな消えてしまうと火事見舞

男装は足を踏まれた声を出し

熱心に本読む夫氣に入らず

屋線の下で水晶の印を刻り

夕暮れの雲うまそうな色になり

動続へ未だあるのかとはどうだ

こほろぎは足を落したのも知らず

首になるのをまん中にして撮し

安治川に友達もなし船頭の子

元旦だ一二の三で跳び起きむ

サイレンの正午があとやさきに鳴り

風ひいたこともあんだのせいにされ

ようかんをいただいてると地震かな

首になり梅田へたれも来てくれず

雨蛙喉がうごいている月夜

今年こそはと立ち上つたがもう桜

すべつたら丁稚にすると励まされ

男の子血の出るとこへ砂をつけ

暑いから猫が泣いても腹が立ち

愛犬の死 (二句)

天国へトボトボ行くか尾を垂れて
うちの犬だけが鳴かない夜となり
ちよかちよかとしておちよやんに

侮られ

こんにやくも侮りたい味を出し
臥ていても卵酒ならとんで起き
販やかに船が傾むく春の海

チョンチョンと左ぎつちよで鮓を切り

ルンペンの箱にも鍵がかかつとる

禿げている方が社長と思ひきや

地藏尊大殺されるのを見ておわし

うすい酒

かけまくもかしこしお神酒水臭さい
衆生とはチリメンヂヤコの類なるか

三角な顔していたり十二月

泡をとばして独逸では独逸では

マネキンは視線の中で痒ゆくなり

カナリヤに留守番さしてどこへいた

ふるさとが近し眼鏡の玉を拭く

生字引コンニヤクと云う字を問われ

食糧不足

ワンワンよ気の毒ながら米が無い

丸停のお布施なりけりなむあみだ

収入をしらべる乞食陽があたり

アーン痛い痛い紳士歯を抜かれ

なつかしくふるさとの蚊にかみつかれ

文楽の眉はパチパチ音がする

ふるさとへいやしん棒をしに帰り

タクシーの走つてゐる間にお元日

逆さまに定期を見せて走るなり

菜の花や遊覧バスはパンクです

マネキンの困ることには乳が張り

すだれ越し幸福そうに飯を食べ

父うさんのヂヤツキヘデツと

目をつむり

開戦

モヤモヤがいちどに晴れたみことのり

出征

塵箱へ突つ立ち上り袂別す

防空主任(二句)

かかる夜に死ねば本望銀の月

惜しからぬいのち笑つてうちを出る

情報情報今ふるさとに敵機あり

B通過あとはいざばらくほととぎす

拾ひ屋も「上海だより」唱いつつ

モンペイのバケツ一杯よう提げず

モンペイの千代鶴さんと見えぬなり

チボ今日は国民服で出かけたなり

さんばつ屋仕事にかかる巻脚絆

さすが戦争吉野山とも云はず

灯火管制

法善寺鼻をつままれそうに抜け

お父ちゃん単に引かれなやと疎開する

疎開なれば荷車も挽くお嬢さん

焼け跡(四句)

つばくろの帰つて見れば家もなく

道頓堀川に映るは雲ばかり

フト見れば罹災者の靴片ちんば

雑草も灰の中から立ち上れ

終戦

お月さんさんねんながら負けました

横穴がいらなくなつたあつけなさ

食うものも食はず少尉に育てたが

食糧不足(二句)

食うものが無いぞと空で鷹が舞う

大臣らどんぐりの味御存じか

負けたのも知らないヒマの二三本

統制とテレコになにもかもあがり

さるほどに火葬料まで値上げされ

うしろにも前にもスリがいそうなり
間違うて拘りなや金のない財布
やがてこの自転車も盗られるならん
ほとけさんこれ十円のまんぢゆです
どろぼうと思うて汽車の連れになり
汚れ目のわからぬ犬の仔を貰い
街を見よ汚れた白衣鉄の足
墓石の輻重一等兵悲し

立話おこんにやくから汗が垂れ
金が無いからよ三角くじをひく
チンピラは仕立家銀次になるつもり
向日葵はズボラな方へ向いたまま
ちちははにめぐりあいたや靴みがく
棺桶のむちやくちやな値と思へども
燈台に人間がいるなつかしき
金歯でも抜こうかというところまで
こんな時えらい坊主も出んかいな
夜の蜘蛛足を一本置いて逃げ
十銭のライスカレーもなつかしや
啄木の真似してカニにはさまれた
大根を断ち一生の恋をする
桐落葉ハラハラ百円札に見え

なにやらが欲しい水でも呑んで寝る
おねーちゃんと言はれて困る

ミスポリス

税金をしぼられに生れ来たような
金もろた方へ政治はころぶなり
百姓家のんびりとして桃の花
ゑびじやこのいのちは樹ではかられて
秋の灯に読みたい本が陳べられ
心から悪友だけが泣いてくれ
お元日負けたはなしは止しましょう
うそにでもうまいというてやる夕餉
花見から綱帯をしてもどるなり
警官の笛へおつさんつんばなり
春うらら

はさみほうちようかみそり研ぎ
夢を見よすばらしい夢を無税だよ
庶務今日はいなり祭で忙がい
こおろぎの哀れは猫に食べられて
雪さらさら厨に鯖泣いてるよ
モデル臍出して全たく無表情
親に向つてホツチツチカモテナヤ
ふるさとが臉にうつる曼珠沙華

葬式屋電話開通知らして来

髭落とすのを忘れてる人多く
平和とは先生でさへわからない
主婦の寝言に月給は未だですか
刑務所がいちばん早やく餅をつき
囚人になつてむくむく肥り出し
スツボンが欠伸をしたか泡一つ
金儲け見戯に似てると思へども
春寒き夜店に七味唐がらし
チンピラが英語で親をからかうよ
旅人のふとさみしきは昼の月
この石にむかし芭蕉が腰をかけ
秋風の中で乞食に拝まれる
ふらんすへ行きたし秋の背広着て
煌々とすしがきようさん売れ残り
河童笛吹いてる月に濡れながら
小市民軒に玉葱ぶら下げて
台所蜷が泣いている夜更け
こおろぎよ動くな猫が見ているぞ
神様へ腰の痛いのもたのみ
ほのぼのと元旦になる酒のいろ
どないしましうか猫が風邪をひき

中学の桐の花こそなつかしや

地藏さん六つならんでいる月夜

やけくそにならんと花も見に行けず

区役所には皆しいべつびんが居り

折詰をあんじよ女給にいかれたり

均一の中にさみしき荷風集

おまへらに味が鮮らん冷奴

無一文というスリルを君知るや

ラブシーン見ている消防監視台

流されて蛙道頓堀だつた

啄木でなければヂツと手を見るよ

ベカコしたような顔だが流行つ妓

秋空のきれいな雲を知らぬ牛

今晩は台風だとさコスモスよ

寝ころんでいずに蠅なと捕りなはれ

こんにやくの一枚さむき台所

街が皆パチンコ屋ばかりに

なりやせんか

パチンコの玉さへままにならぬ世ぞ

破防法通過パチンコをしてる間に

佳い年をとれよとパチンコ屋で袂れ

大学をビリで出た日のあつき飯

若旦那よし奢つたる奢つたる

けつきよくはミミズ煎じたので治り

くどかれたことが無いとはさみしいネ

迷い子の溜りにおばアさんもいる

寝るとこが無いぞ恩赦で出は出たが

オーライで動き出したる霊柩車

ハンカチを振つて南へ征つたきり

らりるれろはつきりしない程に酔い

電話口花千代さんは舌を出し

名人に時計拘られて感心し

腹工合わるし大金持たされて

お元日はかりは小原の庄助さん

へそくりを借りる旦那となりにけり

所も云はずいつペン遊びに來い

恐ろしや火葬へ点火するマツチ

この大雪に税務署が來たりして

吉田さん三振しても引つ込まず

遺言にまで税金のことを云い

パチンコの症状顔が歪んでる

うそ寒き告別式の道しるべ

不景気で困りますよと葬式屋

街の子ら月は屋根から出ると決め

暑いのにわざわざ火事を見に走り

文化都市大阪人の鼻の煤

灯を消して虫をきいてる利休さま

蟹あわてたり電車道だつた

アメリカのおつしやる通り判を捺し

恋人の坐つたところへ坐つて見

イヤリングいやよいやよと揺れている

よし来たと博士が踊る奴さん

機関車も一人で走つて見たからう

警官といへども自転車を盗られ

老夫婦めいめい勝手なものを食べ

飼主も土佐犬らしい顔になり

年寄の日だけ年寄手を引かれ

腕時計動かなくてもいいのんよ

やれやれと安心してる棺の中

慌ててはならんと亀に教えられ

トタン屋根でんぶら揚げる音で降り

秋の夜の隣なにやら釘を打ち

テレビまで見せて刑務所は無料

杉になりたや千年という樹齡

盲目抄



高 鷲 亜 鈍

初老で失明したわたしには、健全な両眼を持っていた頃の虚栄心があつて、全盲人の保全を約束する筈の杖がどうしても持てなかった。はじめ、0・1視力の頃は、昔使ったス

テッキでごまかし、ときに空に右腕に吊り上げたり、ちよいちよいと地面をついてみたりして、キザな紳士ぶりを見せていたが、それでは地面の凸凹に蹴つまずき、電柱やポストに突き当たるので、知らず知らずのうちに、右横に振っていたステッキを、身体の前の方へ持っていく様になった。そして自分の足元より先に、地面や前方の危険物を予め、探るのであるが、そのとき既に、ステッキは、紳士用の愛用品、口髭のようなアクセサリーの効用をなくして、腰の曲つた老婆がつく、杖のように、盲人の頼りすぎる杖でなければならぬ。ステッキと杖、意味は同じでも用途は

全然違うようである。もつとも我々の考えている杖という概念を英語ではスタッフ、という言葉があつた様にも思う。線路工夫がピッケル（登山用語）をふり上げ、登山者が鶴嘴を持つと云えば、可笑しいが紳士が杖を持ち盲人のステッキもどうかと思う。

近 詠

麻 生 蔑 乃

氏神で蟬の残党鳴いている

あすまでの命を光る螢籠

宮入貝蝋もともに討死し

青嵐つつぬけている部屋で伸び

荒波も越えず五十は遠うにすぎ

冷たい表情から掬いとる淡水魚
目あきから慌てられては立つ瀬なし
前向きでいてもうしろに照合し
命令を即座に聞いてくれる杖
目がなくても植物なれば愛されん
蚊よとまれ呉れてやろうぞわが血でも
珍味とはつまみ食やらぬすみ食い
ときたまの世話は秩序をみだすだけ
電柱にけいこをつける初段の杖
炊事場と便所のあいだに場所を決め
怒ってる証拠返事をしてくれず
しかめっ面されても

聞いてくれてるらしくみえ
千円も五千円も同じ札
タクシ一の座席について前を知る
食物のうらみひがみは哀しいネ
醜態をやもりのように晒すふり
見えずとも何かを睨んで一人いる
生きてるかとか悪友らしい見舞くる
失いしもの求めるなどと意久地なし
あなたを愛す光を与えかし

中国お化けばなし

東野 大八

夏は怪談、お化けの季節である。盆行事と精神的冷房価値をネラってのことと思われるが、この点になると中国は妖異鬼仙奇霊志怪のスーパーマーケットである。

まずカンタンにお化けの序説だが、原始時代の人間は、天変地異、生死疾病など人智の限界を越えた事態を体験するたびに、種々の臆説をもつて人間知能の圏外に置くことで処理した。かくて神話が生れ伝説が生じた。超人は神であるから畏敬して宗教を生んだ。生死疾病の恐怖諦観のよすがに、宗教と手をつないだ易占巫がとり出された。その素地はまず口コミであるため、道聴塗説を呼んだが、そのほとんどが妖異怪説で、その尾ヒレをつけた空想力は、自在に空間へと飛ばしうしつづけた。この想像の主知的具象性が文物の進化につれて、詩学、思想、美術の芸術的要素へと発想されていく。だから、私にすれば、夏のお化け、怪談ばなしは、芸文へのつながり深い要素と大いに高く評価しているわけだ

ある。実をいうと、中国の神話、伝説には正統な文献はない。魯迅は、祭祀の原本である太古の巫書からきたのだと言っている。

唐代では、帝やその側近は、巷間の道聴塗説を記録して、民の意志や動向をキャッチして、それを施政面に活用することを考えた。このため、庶民とつねに接触する下役人のうちにその記録係を任命した。これを稗官という。アワカヒエみたいなお寒い役職で、その記録書を「小説」といった。いまでいう小説とはその体質は異なるのだが、私は、現在の文芸のハシリだと考えている。

「変異を語ること六朝で盛んであったが、道聴塗説の断片に過ぎず、これを素材に幻設（空想）の文章に作りあげ、小説とし文才を馳せたのは唐人なり」（胡応「草叢」）

——南陽の宗という少年が夜道を歩いていると鬼に出あった。お前は誰だ、と鬼がきくので、鬼だと答えると、仲間だと思ひ道づれになった。やがて歩いているだけでは面白くな

いから、担ぎっこをしようと思ひ鬼がいうので、よからうと二、三度担ぎ合つて歩いた。鬼は一枚の紙のように軽かった。そのうち少年がお前が一番恐いものはなんだ、ときくと、人間のツバだと鬼が答えた。少年は鬼にツバをつけては担いだので、市場に着いてみると鬼は羊になっていた。少年はそれを千五百文で売った。（法苑珠林）

孔子は、道聴塗説が大きらいで「君子はこんなくだらないものは相手にしないのである」とケンモホロで、その弟子たちもこぞつて「荒唐無稽」とコキ下ろした。この言葉は今も現代の日本で立派に通用している。

お化けといえは、極めつけの代表は四谷怪談、番町皿屋敷、牡丹灯籠だが、最後の牡丹灯籠は「剪灯新話」（明代の瞿祐が作者という）の短篇が原本である。これが日本へ渡来して浅井了意（一六六六）が初めて翻釈し、上田秋成、山東京伝、鶴屋南北を経て三遊亭円朝の十八番「怪談牡丹灯籠」で完全に日本化されて最終の美を飾った。

——今日しも盆の十三日、精霊棚の支度などして縁側へ出ました萩原新三郎、白カスリ浴衣で深草のウチワ片手に力を払いながら、冴えわたる十三夜の月を仰いでいますと、カラコンロンと下駄の音、その音のする生垣の方をと見ますれば、先へ立つのは三十あまりの丸まげの人柄よろしき年増、そのころ流行の牡丹、芍薬の絵模様の紙灯籠をさげ、そのあとから年のころなら十七、八髪は高まげ、着物は秋草の色染の振袖に、朱色金蘭の

帯をしめ、月の光りを冴々とその横顔にうけたヒナにもまれなる美人、これをみました新三郎、思わずゾーッと水でも浴びた様……。

原本「牡丹灯記」は、精霊祭のところは、(毎歳元夕、于明張灯五夜、傾城士女、皆得縦覧)であり、右に掲げた喬生(新三郎)符麗郷(お露)の出会いはい十六文字にすぎない。これを浅井了意は「萩原モノ言え、かの白骨手足動き髑髏うなずきて、口とおぼしきところより声響き出て物語す」式に書いている。

こういうしろものを円朝は、自家薬草う中にしており、その語りの物凄さはカランコロンの下駄の音にある。幽霊に足がないという日本の定説を見事覆した彼の語りのオリジナリティに、この怪談の鬼気迫るお化け効果が出た。

中国の幽霊は全部足がある。そのせいか甚だ健康で、ウェットで、義理堅いのが特徴である。あの世からスーッと出てきて、ごく自然に人間の間へまざれ込み、お楽しみの末子

和歌山市 秋月 宏方

生きんとす蟻日盛りの道急ぐ
スクーター僧にもきょうは急ぐ用
プラカード歩け歩けが金になり

今治市 長野 文庫

あつと云う間でも証言頼りない
後悔が立ちふさがって邪魔になり
面子面子と目的は金だのに

供をつくり、出世させたり金持にしたりしてニコニコしながら消えていく。聊斎志異の幽霊群などはその好サンプルだ。これにひきかえ日本の幽霊は、陰にこもってまさに怨霊というにふさわしく、悪いことをした奴でも、

それをタナにあげて怨めしきやぁと祟りに出てくる。下半身が四ツ手綱の曳き手の様なので、男にホレても一緒に寝れないのである。第一、こいつらは柳の下が大好きなのは、川柳人のわれわれとしては大いに気に食わない。

ともあれ浅井了意の「伽婢子」上田秋成の「雨月物語」などは「剪灯新話」をはじめ、「西湖佳話」や「古今説海」の翻案で、これらをさらに蜀山人、式亭馬琴、山東京伝などの戯作者群が歌舞伎、浄るり、長唄などに流していったわけだ。

六朝、唐、宋、以降の妖異文獻が江戸時代の俳諧をシゲキし、芭蕉は漢詩に対する和詩を支考に示唆しそれが蕪村にうつがれた。蕪村のロマンは、中国式の伝奇的妖異趣味的

今治市 月原 宵明

三味線の鳴るとこ格子まだ残り
固くなら個性齒ブラシにも見せて
普請場の硝子ガラスとペンで書き
上品に喰べればナイフいるバナナ

名古屋市長谷川 鮮山

再婚の方へ傾くそれも齡
虫の音へ夏も峠を越した風

なもののから花開いた。封建時代の江戸期に近代的性溢れる主知的傾向の作品を打ち出した蕪村―それは近世の子規にまでおよんだ。以下蕪村の句。

指南車を胡地に引去る霞かな
易水にねぶか流るる寒さかな

(もちろしこの詩客は千金の宵を惜しみ、わが朝の歌人はむらさきの曙を賞す)

春の夜や宵あけはきのその中に
公達に狐化けたり春の宵

河童(かわたる)の恋する宿や夏の月

狐火の燃えつくばかり枯尾花

青梅に眉あつめたる美人かな

目にうれし恋君の扇ま白なる

うれいつつ岡にのばれば花茨

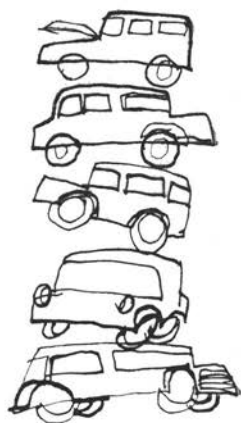
(最後の二、三句でふと橋高薫風君の句を思い出した)

中国で、志怪妖異の興るときは国滅ぶ、といわれている。だが、私はこれは多分に論語的儒教風の、いわば孔子的な荒唐無稽説の反映のように解釈する。天才の狂気は、妖異志怪のようであつたが故に、純粹な詩の花々は、垂直に上昇しつづけてやまなかつたのである。狂気の智恵子に、常人の高村光太郎は空の青さを教えられた。彼はこう書いた。

「ここがあなたの生れたふるさと」

この不思議な別個の肉身を生んだ天地
人間の魂の化相―これこそ俗世の、詩もなく、うたもない人間どもの性根ではないだろうか

(おわび。八月号へご執筆ねがつたのに発表が
おくれました。)



若本多久志著

老いの坂雑感

清水白柳

第二回の路郎忌川柳大会のときに、路郎先生の写真の前へ、心をこめて供えられたものに、若本多久志著の句集「老いの坂」があった。この句集は川柳塔社として発足してから最初の同人句集である。それだけに我々としても、その成果に多大の関心を持っていたのも当然である。

生々庵主幹が序文に書いて居られるが、著者多久志さんがこの句集を出版されようと思いつかれたのは、今年の六月十五日が満六十五才の誕生日に当るので、それを一つの目途としてこれからの川柳生活に一步踏み出すという、大きな意義があったのである。著者はそんな大それたことではないと、けんそんして居られるが、川柳塔同人にとっては、この句集が出たことで刺戟きを受けて、多くの句集が出るようになれば本当にうれしいことである。

又そうした動きがあることは今後事実となつてあらわれてくると思う。

句集に著者の畧歴がのせられていないのは何事にも控え目で、差し出たことは嫌いな性格から書かれなかったらしいのだが、こで少し御紹介して置くのも著者に対しての礼儀だと思ふのであらましを知って頂くことにする。

川柳雑誌第四〇二号（昭和三十五年十一月号）の柳人録によると、姓名 若本真彦（まさひこ） 雅号 多久志 生年月日 明治三十五年六月十五日生 出生地 広島県呉市職業 会社役員 自信の句 袈裟ころも脱げば毛脛の凡夫なり 川柳以外の趣味 園芸・カメラ 川柳に手を染めた年月 大正十五年六月。とのつてゐる。私が郷里の石川県から出ていた柳誌を調べて居たところ、金沢市から出ていた柳誌「百万石」の第四十六号（大正十四年二月号）に 若本真彦の本名で 初売の露店元氣な声で負け という句がのつてゐるのを見つけてお知らせしたことがあつた。著者が学生時代に俳句に興味を持ってい

たことがあるといつて居られるので、多分その時代に気まぐれに出されたのかも知れないが、柳人録の川柳に手を染めた年月には、大正十五年六月となっているが、これは大正十四年一月とするのが正しいということになる。著者の御職業だが、長という名のつくのが嫌いだという性格の持主であるから、専務という名で社の経営に當つて居られる。その会社は川柳塔へも広告を出して頂くことのある、尾崎日産自動車株式会社である。

序でながら著者の自宅は、西宮市津門西口町一二の一五であることもつけ加えておきたい。

茲四五年映画も見てず古稀近し

これは「老いの坂」の中にある一句だが、句の自選ということになると仲々むずかしいもので、あの句も想い出があり、この句も捨てられないと思ひ出すと五千句あれば半分近くには愛着があるものである。それを思い切つて五百句位にしぼるのには、いろいろの迷

いが生じるのも当然であろう。そこで多久志らしい句、つまり作者の個性のにじみ出た句に印をつけてほしいと御相談があったのは、昨年の暮れであった。句稿をおあずかりして私なりに作者の性格が浮かび出ていると思う句にしるしをつけて、お返ししたのが春になつてからであった。どんな句集になるのかは知らなかったし、ポツポツ進めているということはお聞きしていたが、製本には大分苦勞なさつたらしい。表紙や扉の和紙は京都の業者で入手されたという苦心談も洩れ聞いていたのだが、路郎忌当日に見せて頂いてその豪華さに驚いたのである。著者の好みの決さが適確にその装幀にあらわれているのを見て、いまさらに著者の人格に打たれたのである。句稿を通してしていると、この作者は粉飾した句を作っていないということに気がついた。オーバーな表現で鬼面人をおびやかすといった句がない。どこまでも体当りで作句している。つまり裸のままの作者がにじみ出ている句ばかりだということである。それがどんなに力強いものかということを知ると、句集は教えてくれている。例えば「茲四五年映画も見てず」の句にしても、作者の経歴や、現在の激職、ましてや御子息の結婚、そして新居のこしらえなどといったことに、日夜心をくだいて居られた作者の心境がよくにじみ出ているのである。

氣まぐれに靴を磨けばどうしたん
トイレで並びつまでも冷えまん
おっさんと呼ばれ煙草の火を借られ

そやかてそやかてと女艶めかし
金のことやないネンと相談に来
惚れよつてなあと社長の人間味

大阪弁を使った句はまだ沢山あるが、こう
した句に見られるように作者は川柳という目
を通して人生の一こまへの批判を軽い大阪弁
に託して詠んでいる。これだけを見てても作者
が裸になつて川柳と取組んでいるのだという
ことを知ることが出来ると思う。

買うとけば儲かる話炭をつぎ

盗電のコンロなかなか煮えて来ず

白いめし子は何もかも知っている

終戦後間もない頃の句である。品物さえ買
うて置けばよかった時代、物さえ持つて居れ
ばよかった頃は素人でも結構商売が出来たも
のだ。そうした時代の姿をここに見ることが
出来る。盗電の句にしても、トウモロコシの
粉で、パンともカステラともつかないものを
弁当箱の中で電氣を通してこしらえたもの
だ。やみ市でコンロを手に入れて、あらゆる
煮物に使った思いもある。その頃の食糧不
足を思うと本当に夢のようだ。買い出しに行
っても物がなければ食物は売ってくれない。
母の着物を持つて行ったりしたのも、子は子
で敏感にそれを感じていたのだ。共感をよぶ
句であるといえる。

潔癖の父愛用の蠅叩き

又パイプですかと捜してもくれず

腹立てて出たが散髪して帰る

善良で常識の豊かな作者の裸の姿をどの句
にも見ることが出来る。蠅叩きの句にはこま

かいところまで届く眼を。パイプの句には
温かい家庭の雰囲気の中での、せっかちな作
者の姿を。そして散髪の句に至っては思わず
作者の手を握つて振りたくするような衝動を
さえ感じさせられるのである。

時速四十今日は女房も乗せており

どっこいしよと女房も齡をと

或る時は妻の話が理にかな

帳消しのつもり女房と旅に出る

著者が愛妻家であることは句を通してうか

がい知ることが出来る。自分で運転して夫婦

だけで西日本を心にまかせて旅行された時の

句が時速四十の句ではないだろうか。旅とい

えば、沖繩へも行かれたし、ハワイへは二回

も旅行されている。

沖繩

日本の領土へ行くにドルが要り

ハワイ

本願寺出雲大社もあるハワイ

最後に見落してはならない句を二、三御紹

介しておきたい。

逢うたのも別れ話も中之島

退社ベル学生になった手を洗い

十二月八日そうだったさうだった

店番どころか推理小説佳境なり

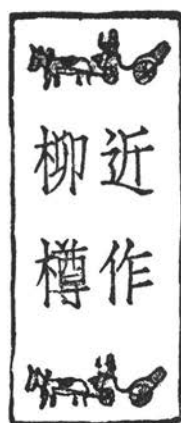
牧水でなくとも泌みる秋の酒

ストローも二人の恋をはがゆがり

★実費四五〇円、送料七〇円。

★申込所 大阪市南区鯉谷仲之町二〇

川柳塔社



北川春巢選

姫路市 前田 美巳 代

恋捨てた日に風紋のあざやかさ

こぼむこと知らず悲しき自動ドア

ジグザグに猫が走つて時雨する

情熱の残りを犬とじやれて見る

愛執の過去を持ち愛を否定する

直角に座して煩惱に対決す

竹原市 三宅 不朽

雲の峰あるけばあるくほどひとり

思いきり足腰のばす天の川

キヤラメルを両掌でもらうすずしい瞳

夜の蝶いいえ私は夜の蟻

停年の旅を吹く風葡萄色

日当をはめられ税務署から帰り

出雲市 王

落ちぶれた後姿を追いかける

紫

涙の出るうちはしあわせなんだよ君

空虚なる響き群衆の拍手

底辺に住んで抒情を詩いあげ

薄情な人の知性に引き摺られ

大阪市 小谷 葉子

愛着がウオツカのごとく燃えつづく

雑草にもまれむなしさだけ残り

寝返りをうつても一人はひとりなり

舞い終えて私にもどる帯を解き

故梅里さんに

寂光を放つささやきモカ冷える

桜井市 岩本 雀踊子

切札があるから女逆らわず

死金を使つて金に泣かされる

瓜切つて土にしたしむ日曜日

仏壇に母は小さく泣きにくる

新潟県 高野不二

酔ざめの水のうまさも男同士
四玉をうて年を見なおされ
家計簿がほしい新年号を買い
大学でなおらぬさかい灸すえる

東大阪市 坂東若芽

殺生はしとうないけど蠅叩き
珍具みなこわすべいの頼もしく
雀かて苦はありますと雨宿り
縁談が三つ重りスターめき

松原市 谷垣史好

漂然と帰れば故郷夏祭り
豪雨もう峠蛙が鳴き始め
ひからびた心へ夏の陽は真上
肥満児の何やら分別くさい顔

八尾市 高杉鬼遊

すまないと思う心が口に出ず
門限の十時は既に酔うている
視線ひきつける隆起の見事さよ
鼻一つ抜けない馬券にぎりしめ

大阪市 池田豊平次

改札を出てから朝の顔になり
これが皆家の下着か雨上り

藪入りの顔の白さを母気にし
四軒長屋さつきは塀の上で咲き

仙台市 平野光道

エリート自信サインも練習し
妻機嫌よくて金ある日が平和
母子家庭子の成長のおそいこと
応接室に物売りに来る元校長

竹原市 岩本文晴

律義者貸してゐることも忘れてず
それだけの智慧で女の高笑い
人みんな顔に似合つた職につき
灯を消してから本当の僕になる

出雲市 竹内李朋

「明治百年」大正風物詩(その二)
乃木殉死大正の鐘鳴り渡り
千両の目は憧れの松之助
スクリーンを抜けて舞台は連鎖劇
ゴンドラを大正琴が歌い出し

米子市 八木千代

母の背の老いが帰郷をためらわせ
寝姿に無口な父の疲れ見る
馬鹿だまぬけだという表現で愛される
間がのびた礼状あの人らしい味

大阪市 奥 川 継 之 助

アベツクの会話にギョツとして四十
それぞれの立場値上げばやき合
たしなめるつもりが妻の知恵を借り
人さまの喜怒哀楽へ義理を立て

堺 市 齋 藤 亜 也

本日の特価顔ぶれを見て列につき
大アンテナここにカラーテレビあり
あらぬ方見つめて妻にこづかれる
カレーの香スキ焼の香団地の土曜

岡山市 行 吉 照 路

太陽はぎらぎら生きるあゆみは止められず
東京の夜は素足で銀座のし
明治百年大正幹部になる定年
雑草に似た人生は枯れもせず

岡山県 瀬 戸 山 文 平

平和像戦争知らぬ子が眺め
学成つて老い2DKの枠に入る
安全帽かむつて平和の日生れ

羽曳野市 菊 地 茶 坊

一人して歩きたき夜もあり宮づかえ
孝行の再婚話がとまどわせ
苦行僧の様に玉子の顔パツク

姫路市 大久保 大夢子

万歩計今朝も芒の伸びた径

アカイエ蚊無くなる頃に効く注射
雨洩りへバケツ断水の水残り

米子市 林 瑞 枝

白い目に堪えてヒーロー氣を採ます
若い氣で居ても幼児が歳を読み
張り合つて女本分忘れかけ

尼崎市 平 井 露 芳

よそ者の螢で名所の螢刈り
テレビ宇宙中継
ロンドンもパリも日本の色で見せ
そこに海があるにプールで泳がされ

大阪市 西 本 保 夫

始末書の字が達筆でまた叱り
小卒を実力主義が公表し
オールドミスとやかく云うてズル休み

鳥取県 鈴 木 村 颯 子

晩酌もある団欒をすだれ越し
遙々と来て飲む酒に味があり
飯場にも必需品栓抜き吊つてあり

貝塚市 行 天 千 代

ボロ家からトラツク二台で嫁にやり
冗談も言わぬ夫で肩が凝り
二三日私も蒸発して見たい

大阪府 井 上 美 恵 子
人前なのに耳の穴かゆくなり

七月一日付にて転勤を命ぜらる(二句)

女つて駄目ねと思う涙なり

終業ベル七年間よさようなら

大阪市和田痴亭

糟糠の妻かてよろめきドラマ見る

七十の熱入れ母校の勝祈り

仏具みなびかびか光らし盆の母

札幌市三宅絢子

新緑のここは美人ばかりなり

よろめきのヒロイン和服がよく似合い

病床に孤独な夜が長過ぎる

広島県岩谷二三枝

独りなら貯めよと易者から云われ

だしぬけに来てとつときを飲んで去に

打水をすませネオンの街となる

竹原市脇本政己

人が値をつける野菜の種を蒔き

長い目でみられそのままで終り

疲れてもどれば花びんに花がない

鳥取市近藤秋星

あの雲になりたし風のままだに生き

非の打ち所のないいうのも又淋し

俄雨さすがの蟬を黙らせる

鳥取市小林由多香

催促に通い犬にもなつかれる

客去んでから女房強くなり

お見舞へ智恵を貸すほど経過良し

新居浜市村上水軍

星一つびんた取られた過去を持ち

不安から解放された顔の皺

陸地より金槌娘嫁ぎ来る

大阪市江城功雄

山陰バスの旅

旅の宴下戸の幹事で恙なく

恩師に再会

伝説の島に恩師のアクセント

鳥取砂丘にて

寝て見たい砂丘はひそと小糠雨

大阪市塩浜一路

定年後の生き方おもう年令になり

運不運大声で話せる友があり

親よりも立派なカバンの大学生

宇部市櫛部いさ夢

タクシーを怒つて降りて雨にぬれ

くれた石愚痴を言いつつ捨てられず

風雪に耐えて家柄だけ残り

愛媛県澄本満子

老いて尚かじつてくれるスネを持ち

もうこれで卒業しますと出る産院

闘病三年良人にすまぬ薄い胸

堺市 高橋 千 万 子

明治百年達者で揃うクラス会
丁寧に包んでくれて忘れて来
玉のこし小銭かせぎと縁が切れ

羽咋市 三 宅 ろ 亭

平凡に生きる楽しみビールのむ
オールドミスそれでもひざを出したがり
一本のネクタイ定年まで若し

北九州市 藤 田 独 楽

テレビ体操寝ころんでただ見てるだけ
電算器そろばん入れて確める
物価高もコーヒー代では騒がれず

下関市 志 賀 木 石

赤ン坊でさえ思惑があつて這い
喰うと言うことに魚まで芸をする
眼の底へ妖しい白さ海女の怪

島根県 堀 江 正 朗

トンビ鳴き雀も鳴いて淋しい日
案じてはいないと涙ふいている
ハッスルをする気散髪屋へ出かけ

尼崎市 中 溪 慶 彦

劇場を出てラーメンで済むデイト
腹の立つ世相にすねてノイローゼ
マイカーで罪亡ばしのピクニック

尼崎市 中 谷 利 美

うまあわせ乍ら欠伸を噛みころし
冷房車一人角力の値上げする
背のびして渡る世間の風当り

八幡浜市 別 宮 すすき

ガラス玉でもよし女光らせる
田植道アベック派手に肩をくみ
大黒柱だけがさえる百年目

長崎市 吉 田 季 生

養殖の蟹土産に持たされる
交通事故見てて車に轢かれかけ
蚊帳の宿ポンポン船に起される

諫早市 前 田 つとむ

あまりにも気がきき過ぎてふしあわせ
この便り着いて笑顔の母想う
貧乏くじこれでいいのさ夫婦愛

高槻市 山 田 スミ子

叱るから叱かられておくことにする
神様にお祈りかけても追つかず
病人が隣のことには気を使い

岸和田市 葛 城 敬 三

来年は喜の字と煙草止めて待ち
内の娘だけと見ればそここ売れ残り
青白き肌も交つて大プール

京都市 大久保 和三郎
おこる顔つくつてゆるすことは選る

家とカーだけはあきらめ三十娘

七尾市 松 高 秀 峰

P.T.A金歯銀歯がよく喋り
味噌汁の味に新妻見直され

島根県 堀 江 芳 子

それよりも風邪を引くなど切る電話
更年期ですと内科脈も見ず

島根県 大 森 孝 華

ライバルの近けば冷風身にこたえ
さりげなく言つた言葉へ胃がもたれ

大阪府 藤 田 頂 留 子

杭全神社祭礼

地車もゆつくり練れぬ交通マヒ
行末は一人ではない南無大師

松山市 河 本 南 牛 史

拳骨が鏡に映り笑いかけ
米俵担ぐ孫出来菜隠居

大田市 藤 田 軒 太 楼

陳情はただ受付けてくれただけ
裏方の苦労表の芸が生き

大洲市 堀 内 暁 風

寝たきりの中気人生観変り
働いて貯めて跡継ぐものもなく

寝屋川市 福 富 隆 子

夫婦仲道具になつてからの幸

一円の砂糖へ主婦は蟻になり

広島県 南 条 露 声

重いとも言えず隣の子を返し
お巡りが立てばごたつく交叉点

名古屋市 花 東 千 久 良

太い素腿並らべ渚は海女の昼
しあわせを尾鰭に強いる熱帯魚

広島県 高 橋 鬼 焼

ヘルメットビルの高さの風を知り
病んでゐるしあわせ米の値を知らず

高知県 山 川 勝 子

浮気する気はない婆さん髪を染め
センターの十円借りてアンマ椅子

羽曳野市 大 谷 重 夫

金詰り熱心にさす神詣り
揉む肩は無欲の糧にはぐされる

河内長野市 森 本 黒 天 子

学生にはさまれ週刊誌読みづらく
鼻に汗を見せて冗談飛し合い

三次市 和 泉 松 風

暑いひる涼しくもてなす妻の顔
明治とは打つて変つた家を建て

仙台市 川 村 映 輝

停年制無いから居据わり売れ残り
病人に休みはないが医者休診

八幡浜市 平 田 三 立
もみ消したあとつぎつきに出る違反
バラまいた夜の当落の結果まち

善通寺市 伊 藤 歌 子

紀の国からとついだ浜木綿咲きつづく
葉計りの朝顔やつと花二輪

島根県 小 砂 白 汀

朝の陽へポプラへらへら笑いこけ
怪獣も二三匹あり夏の雲

札幌市 河 本 雪 男

趣味を持つ老眼鏡は忙しい
世の中を真直ぐ歩いて悔はなし

竹原市 時 広 一 路

目の前にあるのに幸福屈きかね
釘一つ女世帯に当にされ

鳥取市 北 野 天 人

自炊にもあき冷戦の妻に詫び
病む妻に味噌汁の味みてもらい

京都府 菊 沢 破 天

ブルドーザー名所をつぶす凄惨な音
あとの無い財布ポケットで暇なこと

羽曳野市 植 林 信 次

夢に見る故里の丘もブルドーザー
レツテルの評判は良く売れ残る

泉佐野市 大 工 静 子

子の夜泣き盗難防止の役に立ち
年忘れても鏡の姿承知せず

大阪市 田 島 英 夫

辛党にして総入歯うなずけず
本会議狸寝入りも板につき

鳥取市 細 谷 長 平

幾度も孫はめて見る書道展
孫と居る公園の倅桜花舞う

鳥取市 山 本 珂 也 女

月花を美しくう見るひとが出来
赤ちやんもうす着にされた日のきげん

鳥取市 藤 本 佳 女

再会へ恋の火種はつきていた
赤貧へ心の余裕失わず

鳥取市 藤 本 征 也

祝宴へ一樽寄贈の義理が出来
地味ながらかつての恩師招く宴

鳥取市 藤 本 鎮 也

停年へ貫禄がつき肉がつき
大臣の派手さに地味な国訛り

鳥取市 藤 本 和 宏

明治からの懐中時計まだ確か
才女でも母は茶柱まだ信じ

羽曳野市 麻 野 幽 玄

逆らつて焦して拗ねて進む恋

膝に乗る子もなく妻と見るテレビ

中村市 岡 本 香 芳

口程になかつた実力薄い影
涙のバスウロコのしみが光つてる

小松市 四 方 天 弘 実

洗車する雨を待つてる無精者

金と銀二人並んだ子の寝顔

竜野市 森 下 峰 子

ヨット漕ぐ死角ヘリダー声きびし

堂堂と欲引つ下げて大地ふむ

羽曳野市 河 原 林 比 呂 路

もめ事も丸く治める顔を持ち

評判を気かけなやと貸してやり

守口市 田 中 笑 風

トラ刈りも百九十円のサンパツ屋

更新期に反撥妻が着るアロハ

大阪市 伊 藤 一 雲

ちつぽけな厚意にも娘は身構える

日が暮れてから日が暮れる通天閣

鳥取県 川 崎 秋 女

偶然が二つ重なり疑われ

宿直を終えて朝の甘い風

大東市 斎 藤 栄 次 郎

留守番をたのんでからの長話

立札を尻目にゴミの山が出来

泉佐野市 大 工 チ ヨ
子のおむつ換えかえ気になる今日の空
孫の世話可愛くなる頃迎えに来

西宮市 船 津 千 夏

山里も蟹まばらにカーしきり
恥と金海外視察の名で落し

東大阪市 本 多 光 子

勇気出し言つた言葉がよろこばれ
お叱言へまだピンと来ぬ物忘れ

諫早市 原 田 明 春

新世帯のゴール神殿から始め
旅土産旅費より高い子だくさん

大阪市 梅 園 摩 耶

目玉に引かれた財布へ一枚加え
ミニスカートへ羨望の目は女

羽曳野市 影 山 啓 吉

臥す身にも催促状だけ遠慮せず
発車待つ心は故郷の駅に着き

西宮市 佐 々 木 玩 柳

稲荷山続く鳥居に雨を避け
霊験の顕著鳥居の数で読め

大阪市 谷 沢 源 川

銀行員自由にならぬ金かぞえ
天国も知らずに婆さん行きたがり

大阪市 田 中 多 幸

社用族車窓で故郷見て過し

阿呆らしい自由に開く戸をたたき

大阪市 多田富士

御自由にお取り下さい読まぬのに見おぼえの顔マンシヨンの窓の主

大阪市 松岡茶々坊

泣くだけが仕事の孫に汗をかきうぬばれのお蔭もあつて無事に生き

大阪市 花田繁子

人よりも犬の食事に金をかけ自由の身に成れば体が不自由に

大阪市 柳生柳生

御馳走を入歯忘れて見てるだけ涼風を入れた窓に待機の蚊

大阪市 木村濁水

窓際にいても厭弁買ひそこね河内長野市

井上喜醉

弁当へスピード上げた腹の虫オルゴール音色と共にごみ掃除

大阪市 木村久子

結婚は自由にするとういさがり

大阪市 服部憲明

小うるさい電話に出れば儲け口

大阪市 田治一登

御都合が悪くなつたら自由主義

鳥取市 細谷勇仁

師のうたを繰り返し読む夜の炬燵

鳥取市 河口忠志

カラツシユシヤンシヤン踊りが止めている

鳥取市 小谷章代

地味な服若い想いをつつみ込み

鳥取市 藤本恵子

じぶんだけ除けて逃げてく金にみえ

岸和田市 津田千舟

滝ツボの附近で心中助けられ

大阪市 岸川湊

ブルドーザーもうこの附近の値が上がり

橋本市 岸本木魚

附近から苦情でている水の色

倉敷市 小幡里風

その渦の附近に謎の人浮かぶ

伊丹市 貴志千尋

このへんは縄張りですと酌いでくれ

守口市 野呂たん平

絶壁の附近で二人を見たという

米子市 石垣花子

発展の駅の附近は立ち退かせ

★

(大萬川柳復活) / 表紙の4をご覧ください。()

近詠

大阪市 橋 本 緑 雨

達者かいなと寢室から手を出し
想いでの旅の話旅の膳
見送りに振り向くこと忘れなかった

須坂市 高峰 柳 児

共稼ぎ覚悟へ仲人膝を打ち
小雨決行へ気早が濡れてくる
よく喋るのが陳情の先にたち
まだ若い代理床の間しらせきり

路郎忌に寄せて

葭 間 恵 文



(路郎忌句会の自安寺会場寸景・舟遊氏撮影)

麻生路郎さんの風格に接したのは、今から五十二年前、即ち大正六年でその頃、南区三津小学校裏に棲んで居た俳人、川口夷由、節女の夕陽堂であった。夷由は生田南水(花朝女の父)の流れを汲む俳人、妻女の節子さんは松瀬青々の門下、夕陽堂はその堂号で青木月斗が六朝体で額の文字を書いて居た。

解放的な家庭でその茶の間に、当時、文芸の林泉に遊ぶ詩歌人、俳人、柳人が多く集まって居た。歌人では森鷗外の観潮樓歌会にも出席した安江不空、画家では青木宏峰(大乗)、野長瀬晩花、秦テルオ、生田花朝、俳人では月斗、青々、島道素石、浅野宝明、鳩入江来布、柳壇では岸本水府、麻生路郎、宮林薫哉、まことに多彩な顔ぶれであった。この夕陽堂で麻生路郎さんに逢ったのが最初で

ある。

宮林薫哉は信州人で麻生家、川口家、川上日車等の宅に流寓して、路郎さんの所から句集「冬の土」を出版した。一ひばりひばりあわてて下りて鼻打つな―大阪中にまだ喫茶店が十軒あまりの時、一杯五銭その頃からの旧知である路郎さんに、道頓堀の浪花座の東隣りのパウリスター、中座前の旗の酒場、こころで碧梧桐の歓迎会の席上、千日前芦辺劇場横のクレナイ、法善寺境内では「お多福」私が昭和十八年に出版した「啄木覚書」の記念会には入江来布と一緒に来会された。漂々たる風格、鋭い批判、教えられるところは多々あった。

夕陽堂の客で残って居るのは青木大乗、生田花朝と筆者のみ、まことに忙々たる六道常趣なしの思いは切なるものがある。たまたま

自安寺で催された麻生路郎氏三回忌句会に列して、故人の風貌姿勢を想起して、この一文を草した。路郎さんは没したが、後につづく者の中に麻生路郎は生きて居る。

予定紙数尽きて回想記の続稿は他日の機会に。

(写真説明・右から堀口塊人・中島生々庵・若本多久志・麻生霞乃諸氏。)



ヨクヨ
便箋

終戦再出発と

シベリア捕虜

奥谷弘朗

「戦争が課長と人夫に分けただけ」

この句は川維時代に路郎師の選で抜けた句である。昭和二十四年に引揚げて来て就職するにも職はなし困って居たところ、学校の同級生や先輩のお世話で、倉吉営林署に就職することが出来た。然し何でもよいから入れてくれとの条件で就職したのだから、営林署では、臨時林業手を命ず、と言った辞令で、まったくの人夫として就職した訳である。同級生のS氏は当時は課長に成っていた。

直接の部下ではなかったが、同級生に使われる身と成った訳である。

私も満洲で県公署に勤めていた時は、まだ若かったが、それでも部下が居て、日本人と朝鮮人、そして満人を合せて千人は居たのに部下どころか、私の下には一人もいない、いくらシベリア帰りでも、ものごとこにこだわらなく成っていたと言っても、そぞろものの哀れを感じたのにちがいないかった。

戦争さえなかったら、いや!! 敗戦さえしなれば、俺れだって満洲で県公署の課長ぐらいには成っていたのに、戦争のおかげで、人夫にまでなり下がってしまった。

人一倍に負けん気の強かった私には、それがだいぶん頭に来ていたと見えて、「戦争が課長と人夫に分けただけ」と詠わせたのである。

「捕虜四年パンの重さも目で計り」

これは川柳塔に成ってからの句であるが、今年の五月号に「初作の思い出」と云った文章で書いたように、シベリア捕虜の生活を詠ったものである。

日本人は米を食って生きる人間と思っていたのに、シベリアの捕虜にされて、四年間の内三年は米一粒も食わなかった。黒パンと雑穀の粉にした、牛や鶏の飼料のようなものを、どろどろに炊いて、スूप、いや!! ぞうすいと言った方がよいかもしれん。それが捕虜の常食とされていた。収容所で受領して来る黒パンは、一人当り百三十グラムであったが計量器も無し、一本のままで黒パンを宿舎に持ち帰って、当番で百三十グラムぐらいに切って分配していた。

食に飢えて欲も食欲だけの人間になっていた捕虜には、目分量で切り分けられる黒パンの切れの大小を見分ける目が光っていた。

四年間もパンを見つめて生きてきた。捕虜には、百三十グラムの黒パンなら、大きさはこれくらいと判断出来るのである。

この句はシベリア捕虜の体験者でなくては味わえない句かもしれないが、目で計りと言っているのは、黒パンの重さそのものだけでなく、人間の食の重大さを知り、食うことの尊さを、つくづく感じたと言えなかつたものであ

る。

昔から太陽と米の飯はついて廻ると聞いていたが、捕虜には米の飯はついて廻らなかつた。身をもってパン(食糧)の重さを感じ取ったことを詠いたかったのである。

(陸軍兵長)

軍人通訳誕生

辻 白溪子

私の軍歴は五年七カ月、その殆んどを中北支で過したので幾多の苦勞も味わい、又何度か危険場面に遭遇した。敵に囲まれたまま食糧が尽きて水だけで空腹を支えたこと、又作戦の都合上四百キロの道を一週間夜間だけ歩いた苦しかったこと、又分哨に出ていた小隊が夜襲を受けたとき下痢のため本隊で療養していたため唯一人助かった心苦しい思い出を持っている。平和の確立を武力によった悲惨さ、戦争のむなしさは最近テレビドラマ、小説等で紹介されているので私は多少交った経験を書き添えていた。

昭和十六年といえは北支は第一戦部隊が通り過ぎて治安工作が始められていた。当時の通訳は韓国人が殆んどで彼等のなかには随分悪らつな者が居て中国人から金品を強要したり、婦女子へのいたずら等好ましくない現象

があった。このような状態であったから日本軍の誠意が通じる訳はなくしたが、つて対敵行為に必要な情報が得られず謀略の危険に絶えずさらされていた。そうした状況を克服する策として軍人通訳をつくることが考えられ、当時指揮班(庶務、経理等を処理する班)に属していた私に石家荘の教育隊へ派遣を命ぜられた。教科の内容は軍事会話が主で、「お前何処から来たか」「敵はどの方向へ行ったか、何名ぐらいか」等簡単なもので至極のんびりとしたが、終了の六カ月間際、北支那方面軍で高等教育隊ができてそのまま北京へ転属、高等科終了まで中国人の講師だけという不自由な境遇に置かれた。たしか一カ月経ったとき教育隊長から日常の会話は勿論、朝夕の点呼等総て日本語使用禁止の命令が出されたので、唾の手真似顔負けの会話が交され、必要以外のことは努めて喋らぬようになった。寝言にも中国語がでて不寝番をおどろかせるという珍事まで発生、言葉の如何に重要であるかと云うことを十分認識させられた。

啞でないかちこちない手真似をし
不寝番寝言を夜騒かと思ひ

日課のひとつに会話練習があった。教育隊のすぐ隣りの北海公園は朝から上流人の散歩が見受けられ、朝食前のひとときを彼等と会話することに定められた。予め軍からの協力方を公布した関係もあって教育隊の記章を見つけ先方から話しかけられることもしばしば、そのうち評判が拡がって散歩が増え兵隊の方が奪い合いされるといふ珍事も発生し

た。兵隊といふいろいろな面に意志が通じる親密感はこちらが思っていた以上の好感を与えたことは事実である。

そのうち彼等と心安くなり休日の外出を兵門に迎えられ北京の名所、史蹟を案内された。王朝の名残りどめる紫禁殿、建築の華麗さにおいては類のない天壇、万寿山、それに各公園等その美しさはいま尚腦裏になつかしく残っている。実習には通州の治安聯隊に三週間編入された。彼等と同じ生活をしたから食事は二食共饅頭で、空腹と白米恋しさのため日本旅館へ食事に行つて不審がられたこともある。やがて教育につきものの試験がやってきた。なにしろ教師が全員中国人だから科目も翻訳等の筆記ものはなく、会話と演説だけ、その方法も教師にひとりずつ面接だから慌てざるを得ない。然し不思議に得点は良かった。た。教育隊長からお叱りはなかつた。

朝からの会話欠伸をしておれず
銃声が此処までとどかぬ教育隊
採点をふやして教師に面子あり

帰隊した私には軍人通訳のほかに治安隊の指導官という任務が待っていた。勿論前から居た通訳はお払箱になったことは云う迄もない。その後私は通訳と演説をして歩いた。日本にも方言があるように人が受ける土地が広いのと、義務教育を殆どどの人が受けてないもので標準語(北京語)すらも通じない処が多い。それでも土地の有力者の介添によつてなんとか目的だけは達していた。指導員としては、

教練の指導、軍歌演題を受持ち、又治安隊の一室に起居し彼等と同じ服装で中国人の名前と階級を胸につけていたので中隊の歩哨に間違われ銃剣をつきつけられたことがある。

中国語を知つて見識した中国は東洋人という共通点から本当に親しみのある国で、その生活環境、性質等は興味深いものがあるのでいづれ稿を改めて書いてみたいと思う。

介添の要る通訳を親しまれ
どちらにも利用をされて指導官
戦争がすみ通訳と縁が切れ

(陸軍伍長)

(おことわり)西田柳宏子氏の「運・不運」金井文秋氏の「仏印作戦に参加して」は次号)

色紙短冊
書画用品

大塚政一

丹青堂

ちゅうせいのてい

秀句鑑賞

：前月号から：

人生の傾斜へころげまいとする

(二三夫)

人生とはおかしなものだ。平穩ぶじに月日を送る人も居れば、あくせく暮す人もある。順調にいつてますと云つても、一生食うことに苦労をしなければならないものである。

この句の「人生の傾斜」とは、愛でも恋でもない、云わば人の浮き沈みに関すること、有為転変の別称であろう。

「ころげまいとする」とは、うまく云つたもの、充分に句意を生かしたようだ。

夕日あかあかとキャディもきよう
終わる

(甲 吉)

詩情に富んだ句だ。クラブの袋は重たい。キャディは一日でくたくとゴルフにいつて廻る。自分は少しも楽しいとは思われない。それでいてキャディはゴルフの調子のカギを握るようなもので、誰れでもいいという訳にはゆかない、目と指先で意志の通じ

後藤梅志

会うキャディでなければこまる。

おとなとは、体力のちがうキャディが、ひろいホールを廻る間には、様々な感情がひそんで居そうなことをこの句は暗示している。

神経を使つて半間の足拍子

(潮花)

作者の芸道生活は、眼疾で入院更らにきびしいものとなつたかと思う。眼の確かなときは、造作なく踏める足拍子も、視覚のおとろえは、ともすれば大事な足拍子もちぐはぐになる。これは練達な舞踊師にして、猶かつ免かれ難いものであらう。

華やかな舞台生活のかげにも、人に知られぬ苦心はあるもの。その苦心がさらに円熟の芸道を生むものと思われる。

この句には、不屈な作者の明るさがある。

旅の町それも世帯の目で眺め

(花 宵)

旅の町、それはどこか分からない。「それも」も、どれを指すのか分からないが、この

句は「世帯の目で眺め」にすべてを凝結させているのである。不思議な作句手腕というほかはない。

旅の町なかには、多くの無駄があるにちがいない。無駄ばかりではない、物の在り方、たたずまいに、主婦の眼としては見逃し難いものがあつたにちがいない。

作者が「世帯の目」というのは、実は作者の優れた主観であらう。

天気予報当りばなしで稲が枯れ

(宗太郎)

今年の天候は順調だったが、すこぶる男性的だ。これは三、四月の長期予報でも云つていたが、ガッチリ当つたのである。去年の多雨現象とは反対に、早くから好天気、高気温に恵まれ、お百姓さん大満悦のはずだったが、この七月に這入つては、更らに旱魃の度を加えた。

世の中のことはどうもうまくゆかないものだ。日頃は、余り当らない天気予報まで当り出し、その上稲が枯れる騒ぎである。

「当りばなし」がおもしろい。

定休日守らぬ店に助けられ

(奇 童)

戦争以来、日本人は融通がきかなくなつた。定休日という、需要家のことも考えないで、どの店も締めてしまふのである。

都会では、日曜は中央市場が休みだからという理由で、大抵の公設市場は休みである。シャッターを下ろして、店員は一人も出て来

ない。店員あって、お得意はなきが如しである。ここでも民主主義をはき違えている。

然るに一軒、定休日を守らぬ店があった。来るお客さんの数よりも、一人一人が感謝することは受合ひである。

この作者は卒直に、この感情を句にした。

大陸に四季あり兵としての過去

(日 満)

桜井忠温の「肉弾」という戦記をみると、「日本人ぐらい土に密着した国民は居ない。兵のあるところ、忽ち、大陸の土壁に朝顔を咲かせ、土のあるところ、四季の作物を作り出す」と、こんなことを思い出した。

この句は、作者の従軍当時を回顧した句と思われるが、まず「大陸に四季あり」は構想がひろい。また「兵としての過去」はすべてを物語ってあますところがない。

作者の戦争観はどんなものであろうか。この句はそんなことを思わせ、見る人に親しみを感じさせずには措かないであらう。

そろばんを出すほどバーに借りがあり

(きさ子)

「バーに借りがあり」である。おもしろいではないか。どんなくらしをしている人か。この頃の世相を物語って余りある感がある。さほど生活に関係がありそうでもないバーが繁昌して、相当に重要な職域を占めていることは、世の中のうらに不純がひそんでいることになる。社会の表裡が、尋常一様でない

ことを思わせずにはおかぬ。

この句は「そろばんを出すほど」にウィットがあり、見事に句の興趣を引立てた。作句もこんな工合いに急所を衝いて詠まれると、文句のつけようがない。女性の句とは思われぬ。

値切ったら僕アルバイトですと言う

(蘭 幸)

何を値切ったのか分明ではないが、一読愉しくなるではないか。

アルバイトがデパートの包みを配達してくると、その家は学友の家だったりする。ヤアヤアである。このように春から夏にかけては、どこもかしこもアルバイトだらけのような感もするが、アルバイトも今や立派に社会の要員となり得た観がある。

この句はやはり「値切ったら」がいのちかとおもう。面白いのは、作者も矢張りアルバイト出身かと思われることだ。

さて何の用か二階まで来て忘れ

(野迷路)

この句は誰れにも経験のあること。作者は一つの老人現象の如く考えては居まいかと思うが、私などはそっかしのか、青年時代からそうであった。勢いよく二階へ上ったがさて何で来たのか分らない。仕方がないから二階を下りてくると、とたんに思い出す。人の性はそんなものと、その都度疑問に思っていた。この句を前にして知已を得た心地がする。

こういうのを心理学では「記憶の懸望(とんざん)」と云う。一時的に記憶が逃避したのである。だれにでもある現象だから、心安けりた。

増築へ我が臨終の部屋も入れ

(どんたく)

不吉なことを云うて居るようだが、この句には、不吉な感はずしもない。否むしろ「増築」の文字が多々益々弁ずる旺盛な生活力と思われ、微笑を禁じ得ないのである。

これがもし、同居の年寄りのであれば、平凡極まれないが、吾が臨終のであることが、句に軸心を与えたのである。

この頃は世の中も忙しくなつて、わが墳墓の地どころか、わが死に場所さえ求め難い。この句は、すでに功成り名遂げた人でもあらうか、羨ましい限りである。

見えるかも知れぬ按摩の色眼鏡

(芳 仙)

按摩さんは目が見えぬ人の方がカンが働いて、療治がしやすい筈である。目明きのあんまは、警戒心を起させて商売上不利である。そこで、按摩さんは色眼鏡をかけたたりする。ところが色眼鏡というものは、よく偽装に使われたりする。目が見えるくせに色眼鏡でゴマ化すのかと、いらぬ不安を抱かせようである。

「見えるかも知れぬ」がこの句のミソである。温泉地らしい面白い句。

初歩教室

題 影

菊沢小松園

影というものが掴まれそうで手には出来ないものであり、はつきり見えていても一つはつきりしない取扱ひ難いものであるように皆さんが、戸惑された様子が句を通して想像されて面白い。私は課題吟自由吟の練習としての意味から、なるべく広義に取っているのはいつもの通りである。

焦心の夜は月影も慌ただし

電柱の影とひと見の淋しさよ

ひととけば句誌に知らぬ柳友の影

吾が影に龍神出そう淵に佇ち

噂した影が見えに笑いこけ

(1) 自嘲の句らしいが残念ながら焦点がはつきりせぬ、もっと具象化して句意を明確にしたい。

(2) 電柱に引っかかる、あまりに技巧に過ぎたようだ。大木の影なら判るが

電柱では涼しさまでいくまい。(3) 句誌を

編くがおかしい、句もそれだけで何もない。

(4) 句材の失策。(5) 題の影を無理に入れただけこの場合は影でなくて人でなければならぬ、失敗の句であっても、前車の轍としての参考にはなる。

影で糸繰つられてる人のよさ

亜也

影

影

影

影

A Y Y M M

ステージの影も計算しつくされ
影二ついつか一つになって溶け

影のある女と判かる終列車

師の影を踏んづける子に策もなし

(1) この影は見えないところの意、うしろ裏へ廻って色々工作してるのに、正直なこの人は今だに気附かぬ、人の好いのも何とかの内か。(2) 舞台人の企画の抜目なさ、影さえずでに効果的に考えられて居た、観客の眼をごまかす為に。(3) 二つの影が一つになっただけでは誰しも思う所であるが、この句主は突込んで一つにならないで溶けてよくその場の情景まで想像される巧さがある。(4) 過去の暗さを秘めた女を、終列車の下五がよく現わして動かぬ句になった。商売女を言外に思わせるところさすがである。(5) 道義地に堅ちて、先生もお手上げ時代の子供がよく出ている。

赤い灯の影に補導の目も光り

大木の誰はばからぬ影を投げ

どこ迄もアベックで行く影ぼうし

影口が大きくって誠になり

影長くいま残業の門を出る

花子

花子

花子

花子

花子

花子

花子

花子

花子

花子

花子

花子

花子

(1) 月影を碎いて月見草の露こぼれ 白汀
(2) 警察や学務課の補導員の眼が盛り場に
歓楽街に光っている。下五のものがよく利て
いる。(3) この大木を大資本家と見立てた
ら、句の真意が判る、そこに独禁法の必要さ
が生じる。(4) よくある場面、ただ何処ま
でもで僅かに救われた。(5) これもありふ
れた句材である。恐らく工場内での調子に乗
った影口の結果だろう。(6) 充分に働いた
人達の夜更けの工場の門を出る。家へ急ぐ人
影も明日への希望につながるものであろう。

(7) これは奇麗なと言っただけで、全く俳句の
覗いどころ、清涼感を感じるが、もっと人間
臭さがほしい。

長生きの母に似てきた影法師

親の眼に同じ影踏みして遊ぶ

寢息聞く看護婦足音しのばせて

スピードへ影も欠けずにつきまとい

(1) 句境が明るい、長生き、母、目度さ
が影法師まではつきりさした。(2) 昔時よ
くやった懐しい子供の遊戯であるが、今はあ
まり都会では見掛けぬ、親の幼かった時代
のように子供達も遊んでいる。親の満足感も
窺い得て微笑ましい。(3) 句材の面白さに生
きた句、看護婦の温かい人情味がうれしい。

(4) 説明の入らぬ句、ユーモアもあり面白
い。だがこれを車の句にするのと少々あふない
酒の席も音痴絵で座をにこし

横道へそれてよりそう影二つ

影踏みめ教えも明治も遠くなり

想い出は廻り燈籠の影を追う

千夏

二三

和風

頂留子

頂留子

頂留子

頂留子

頂留子

頂留子

頂留子

頂留子

頂留子

頂留子

頂留子

頂留子

頂留子

頂留子

頂留子

頂留子

(1) 手や指や時には体全体で障子などに影をつくって見せるもので芸無しが酒席で困ってそれをやったり云うのであるが着想も古いし明治時代を思い出させるようだ。(2) よく判るだけで二番せんじの感じ、語呂のよさで句会向きのする句。(3) 三尺下って師の影を踏まなかつた年配の人の懐古思想が、明治は遠くなりけりからませて考えさせる句になった。(4) 常套手段で言い古されたことで只それだけで後に残るものがないのが淋しい。(5) 無理に題に合せたようだが、極わ物の新しいところが取り柄か。影薄うなつて此の世にある未練

影画など今の子供は見てくれず
静子

大洲市 米 沢 暁 明

日当ですまそう昼はBランチ
おそく来て話しまとめた御顔役
タイミングよく賛成をするさくら

○

子に聞けばあつちと指をさしただけ
かあちゃんはやっぱうまい田植すむ
女から借りたお金はすぐ払い
戸籍ではすったもんだのない夫婦

仲なおり手を取り合つた影二つ
師の影を平気で踏んて抗議する
厚化粧の影はかくし得ず
同 保 夫

(1) 高齡になると聞いて生きたいと思ふ欲望が強くならんと聞いているをすばり詠んだ。(2) 子供との時代の距たりを感ずる大人の哀愁がよく出ている。古い句材もこう活用すれば立派に生きて来る、佳句。(3) 誤解もやつと解けて影もより添つた云うのである。素直だけが取柄。(4) 現代ツツの一面を突いた句、金言も過去のものとなつて影を踏むどころか時には頭も殴りかねない。(5) 人間の正直さは心配があれば顔にも出る厚化粧の商売女の心臓でもかくすことは出来ない只それだけの句。

明治の母明治の父の影踏ます
わが影のように寄りそう妻のおり
失意の日影もやっぱり肩落し
同 秋 女

酔うてから踊れば影も酔うている
出来心己の影に追われてる
影法師一人でなかつたと氣付き
同 軒 太 楼

(1) よい時代の夫婦の姿、しかし現代の若人達には抵抗を感ずるだろう。(2) 形影相寄る仲のよい夫婦と云うだけもつと突込んだものがほしい。(3) やや暗いがこの方に心引かれる。不安気に見守る妻子の姿も想像されて彫りは深くなった。(4) やや理屈っぽいがこの程度ならよい。(5) 俗に云う魔がさした軽い不徳が心の影になつて苦しめられる。叙法の達者で救われた句。(6) これも同じく達者な一語で尽きる。我が影法師にハッと氣附い

て慄然、氣附かずに見過ぐす境地を一句に纏め上げたところ巧手と云へる。
川の子の短い影がお父ちゃん
弘 実

片思い窓辺の影が胸騒ぎ
安来節障子の影へ笑われ
飛石に立たせ影と撮る角度
初 甫

わが影もいま同じと考える
同 初 甫

(1) 川の子に寝るとは聞いたが、立っているのは如何であろうか。(2) 純真さは窓辺の影にもしやと心迷うので落つかぬ、この人もやがて現実を経験すること、まよふ当って砕けるのずぶとさになる。(3) 軽い寸劇である。ユーモアもある、さすがである。(4) 撮られてる人の年配までが窺えて落附いた句として頂く。(5) 人間の心の不思議さをよく老練さすがに一句に纏めた。

ほろ酔の後から影も酔うてゆき
丁度よい影で男の手が求め
同 露 声

そつと寄る影をトンボの知つて逃げ
この方の本月はレベルの高い句が揃つたように思う。(1) ユーモアの句として頂く、よく句も洗練されている。(2) 上五がよい動かぬ語句とはこう云うのを指すのであろう。佳句。(3) これもよい、凝人法で成功、トンボも苦笑して逃げたことだろう。

選 者 吟

搜しての声へ影から手を合わし
十月二十日締切 十二月号発表

題「雜草」

宛先 大阪市阿倍野区王子町四丁目2番22号
菊 沢 小 松 園

波 紋

都 倉 求 女 選

町内に何時も波紋を起こす口
村に波紋残して女教師転任し
波紋などかわりなくよくつとめ
投石の波紋拡がる釜ヶ崎
政治疑獄いつのまにやら波紋消え
米ソ首脳寄れば世界中動き
核爆へ日本の空は雨となり
記者の眼が探る波紋の楽屋裏
波紋思えばこの愛に踏み切れず
水すましリズムにのっている波紋
雨だれの波紋見ている雨宿り
澄んでいた入江ふざけた石つぶて
春闘の波紋下請また値下げ
スランプの波紋におぼれまいと
親切が深入りすぎて立つ波紋
波紋呼ぶだけに開いた話し合い
誰に見てもらう間もなく波紋消え
蚊とんばは蚊とんばなり波紋画
うつぶんを知らず波紋は石を呑む
手ごたえを見越と波紋なげかける

石投げた波紋を見てる抵抗期
菱の実へ波紋掌で漕ぐたらい舟
雨だれのリズムに波紋いそがしく
池の鯉波紋のこしてそれつきり
雨の川波紋ふくれて流れゆき
主婦連がお尻をあげて来た波紋
何でもないことが人事課へは波紋
どししりと父は波紋も立てさせず
波紋の中心しらん顔して水すまし
ひとつずつ植えた波紋が田を青く
予期しない波紋野党がついて来る

旭 峯 千 代 雀 踊 子 齊 花 紫
水 車 紫
晃 男 光 道 季 賛 どん たく 素 身 郎
中心を移して波紋また起きる
波紋だけ大きく残しなしつつ
恋しさは投げた波紋へまた投げる
雨だれの波紋へ献立考える
絶景を崩して波紋の憎らしさ

初 甫 章 雅 芙 巳 代 珂 世 女 季 生 可 住 保 夫 征 也 古 方 無 聖 曉 明
十九平 無 聖 摩 耶 初 甫 白 汀 秋 女 千 翁 天 千 翁 文 平
胸の底に波紋いつまでもいつまでも

リ ー ダ ー

浜 野 奇 童 選

リーダーの予言通りに霧が晴れ
リーダーへ何やらしょうもない電話
身銭まで切ってリーダー叩かれる
大男坐らせリーダー意見する
リーダーも今一息の甲子園
リーダーが変ればメンパー皆変り
リーダーになつてピースに変え
リーダーがママで大掃除が終り
リーダーに確執理論派・実力派
監獄の中からリーダー指令出し
リーダーへ髭の濃いのを選び出し
リーダーを社長自ら買うて出る
遭難のせめをリーダー受けて立ち
リーダーの今更誤算とも言えず
リーダーとみなされお灸据えら
リーダーの貫録わが子を見直す日
リーダーがはめをはずしても和み
リーダーだった男リニューマチス
ヌードまで見てリーダー叱られる

宗 太 郎 保 夫 白 汀 瑞 枝 雄 声 藤 波 可 住 幽 谷 章 雅 七 面 山 礎 山 征 也 忠 志 秀 峰 慶 彦 秋 女 秋 月 古 方 醉 夢

方 角

西 森 花 村 選

リーダーの下に小ボスの居る派閥 代仕男
リーダーは手をもちにそりかえり 亭
リーダーの声さえてくる踊りの輪 美巳代
リーダーの通りに間違う応援歌 どんたく
リーダーシップは妻がもてる共稼ぎ 素身郎
一点を先取りリーダー狂気じみ 芳子
リーダーも磁石ひとつがたより 水車
これからはリーダーの言まき岩立 季賛
金づるがありリーダーに担がれる 素身郎
リーダーの影武者という目が光り 芳仙
万全の策ありリーダーあやまらず 文平

佳

リーダーを信じて山の雨に耐え 季賛
リーダーのおだてに乗って平和 恵二朗
リーダーの首が気になるスト要結 李朋
リーダーが一番粗末な服で来る 十九平
リーダーの笛がたくみに踊らせる 恵二朗
鼓笛隊リーダー可愛い胸をはり 芳子
薄情なまでの理性にリードされ 紫
人
リーダーが哭いて勝利が盛り上り 千翁
地
リーダーの過信ビッケルだけ残り 無聖
天
名曲のラストタクトに吸いこませ 紫

旅の朝日の出に方角教えられ 勝子
お釈迦さまずっと天上指しつけ 水車
方向も地図の上ではよくわかり 和彦
方言がまじり方角聞きとれず 双楽
発展の土地方角は言うとならず 雄声
台風の方角またもこちらむき 雄声
方角を覚えた頃にまた異動 雄声
車窓からあの方角が僕の家 曉明
暦みた日から方角気にかかり 正朗
方角をおどして占者めしを食ひ 芳子
方角を変えて捜査の手を拡げ 白汀
方角も書かず略図を送って来 宗太郎
方角がよいのか稲荷はすに建ち 幽谷
家運隆昌方角などにこだわらず 初甫
方角は御所を拝する彦九郎 藤波
セールの方角雨で変えてみる 李朋
方角はここようだがビルが建ち 季生
方角はどうでもよいとアパート建 一路
近道をして方角を見失い 鶴丸
開運と言う方角を信じとく 恵二朗
佳女

佳

親切はその方角へみちびかれ 無聖
逃走の方角易者に相談し 秋月
退け時間方角はどちらかと聞かれ 季賛
方向が一所ほのかに恋めばえ 素身郎
鱈曳の智慧が方角変えて出る 軒太楼
客席を西と見立てて舞台の死 湖平
おみくじの通りの方位で肚を決め 奇童
酒の酔いさめて方角定まらず 天人
すたすたと方向音痴行っちゃい どんたく
赴任して北極星をたしかめる 齊花
見当をつけて走った夜の火事 古方
人
方角は判るが道が多過ぎる 恵二朗
易者とは違う方角から戻り 露声
満ちたりて東西南北みな恵方 十九平
どちらから見ても美人は美人なり 七面山
良縁へ方角のこと触れずおく 秋女
地
方角で来た道なのにすぐ曲り 保夫
天
方角も日当りもよし値も高し 秀峰
信念執念とうとう出口にたどり着く 古方
軸
火葬場の方角妻が死んでから

句集「老いの坂」出版記念句会

八月七日夕 会場 自安寺

連日の猛暑のせいであろうか、いつもよりやや落ちる出席数だ。それでも句集「老いの坂」ほしさにという、久しぶりの西森花村氏などのご出席でにぎやかなことは変わりない。白柳氏の柳話は、この多久志句集について、時間いっぱい熱弁である。体臭がにじみ出ている句集のよさ、派手さのないのは氏の人柄で、そのかわりスキのない句集としては近來のヒットであろう。

各選者のほとんどが、ひと言、多久志氏に祝いの言葉を贈って披露するあたり、出版記念句会らしいムードも明かるい。

八月句会のカップは再度羽原静歩氏の秀句にかがやき、海士天樹氏と二回ずつでトップに立ち、永久保持は二氏のうちからという計算が大きくなった。同点の場合は天位の数によって決定されるので、こんこの秀句に期待がかけられるわけである。

ベテラン栞氏が二ホーマー、久しぶりの栞治郎氏も堂々の秀句を放たれた。

閉会後「老いの坂」を祝う有志が多久志氏を囲んでこの句集につづけとビールの乾杯をあげた。
(河井庸佑整理)

出席―静歩・与呂志・薫風・好郎・双葉・瓢太・古方・奈良子・文秋・白柳・多蘭子・花村・摩太郎・一栄・章雅・旅風・凡九郎・たつみ・白溪子・一三夫・知恵・柳宏子・吸江・笑痴・喜静・芙巳代・栄太郎・清人・多久志・金三・形水・葛城・宣介・野迷路・弓彦・勝晴・圭井堂・静馬・露芳・誠・鉄児・トメ子・千梢・笑風・頂留子・生々庵・天樹・小松園・すゝむ・庸佑・一舟・栞・季賛・葉子

席題「自動車」 本多清人選

自動車の名前幼ない子が覚え
車庫がなく友の名前で乗りまわし
故障車はさみラッシュの道せまし
通動だけの車で高くつき
婆々抜きカー付きをさがす免許状
月賦まだすまぬ車で事故にあい
自動車が路面電車を地下へ追い
自動車ショウ別の世界を見て戻り
うるさ型帰えす自動車来てくれず
病院へ蒲団と乗った自家用車
セールスはあき来る頃に新車見せ

文秋 千梢 千梢 庸佑 一栄 庸佑 栞 栞 好郎 好郎 好郎 彦

席題「坂」 橋高薫風選

クーラー車の値上げ柳眉に崩さる
つづら折れバスのスリルへ酔ふ二人
ハンドドルを握りばんこのハネムーン
砂利トラがフル運転で餌漁る
若い情熱発散させるサーキット
マイカーへ痛い車検の整備代
お隣りも自動車の免許取るつもり
自動車を買われ白髪をまたふやし
ミニカーは外車ばかりで名を知り
禁駐車札の札が小さいタバコ店
抽せんで当る自動車撫でまわし
妻先に免許をとって乗せてくれ
おそろ方自動車の中から視察をし
輪廻いよいよ猫も杓子もカーを持
お隣りの自動車らしい午前二時
セールのカーでセールス社に通
運ちゃんが回り道した小さい欲
飯免の車堂々エンストす
ナンバーに賭けて真昼の釜ヶ崎
クランクショントモ門がすつと開き
自動車を買いえば家業を継ぐと言
一攫千金車の列は競馬場
外車乗りまわし手形へ必死なり
小型車に体位向上詰め込まれ
自家用を降りて思案の分譲地

章雅 奈良子 笑痴 野迷路 庸佑 栞 笑風 一舟 白柳 白柳 宣介 多蘭子 千梢 千梢 宣介 摩太郎 金三 柳宏子 吸風 トメ子 多久志 一三夫 弓彦 清人 千梢 吸江 花村 一舟

先達が坂へかかると声を掛け
自転車を立てかけて居る長い坂
おぼろげの記憶の中の郷里の坂
この坂をのぼれば見えるはずの坂
見送りの振る手だけが見える坂
坂一つ越せば訛りの違う村
市電いま坂にかかった音となり
七十の坂にかかつて芽が出だし
坂道へかかり夕映え美しい
坂道へ無口の人と登りけり
坂一つ越えて彼岸へやや近く
やった子が坂で重荷を背負てた
アベック何時の間にやらすんだ坂
新団地古い坂の名だけが生き
地藏さんにハット気がつく下り坂
六十の坂から白髪もう抜かず
坂おりの男たしかな歩幅もち
いつとなく手をも合てる老の坂
坂道で恋を語れば息が切れ
家康の家訓通りに老いの坂
坂越えて越えてやっぱ坂があり
坂の中途に入口のあるホテル
五十年女の坂は七曲り
鈴高し祇園祭りに坂のなく

席題「若い」

岡橋宣介選

老い先を退職金で割って見る
住みなれた家路の坂にも老いを知り
老い先を案ずる割に働かず
大臣はなぜか老いない秘訣もち
明治生まれと言えは百才かと子供

金三 白柳 すゝむ 頂留子 好郎 小松園 清人 圭井堂 静歩 勝晴 奈良子 トメ子 清人 双楽 古方 一栄 天樹 生々庵 多々志 多々志 静歩 白柳 静歩 薫風

お互いに再会の顔老い給い
老いたとは言え白髪も話題にし
古稀にしまだ矍鑠と句にいどみ
老いの身へ今日も世界の報せ来る
老い知らぬ俺に子供等してくる
いつまでも生きると思う老夫婦
老いてますますとはえらい言葉
仏壇と仲良くなつて老いてくる
倦怠期のままの無口が老いを知る
万年青年それそれなりに老い
不足ない齡でこの柄地味やるか
気がつけば老人組と呼ばれて居
人生を真面目に老いて蘭とい
老いかくす化粧へ女手をぬかず
口だけは益々達者に老い給い
一徹の老いがあつさり貸してくれ
ステッキは我を通すのに持て老い
行きずりの葬式拝む齢になり
節分の豆の数から老いて行き
老いの肩恋むずかしき舞扇
老いてなお女のことを聞きたがり
お迎えはまだかと死にそな顔で
老いの感情シワ動かすだけのもの
老い易いものと知りつつ歳をとり
老人なるやしきりに人の恋しくて
老人幼きに似たり父の横顔を見る
残雪の老いかたくなに夏はしく
ちよつとした言葉老眼がうるみ
歳だなあと思うその背を見送られ

兼題「ゴシップ」

河相すゝむ選

笑風 多蘭子 双楽 好郎 凡九郎 トメ子 一三夫 清人 生々庵 古方 一栄 一舟 多蘭子 笑痴 柳宏子 静歩 白柳 静馬 笑痴 知恵 小松園 多々志 笑痴 旅風 静馬 多蘭子 天樹 葛城 宣介

ゴシップはともかく焼香の順を待
聞き捨てるゴシップ友がむきに
ゴシップも楽し女は息を抜く
ゴシップの出でこ気にも落ち目
ゴシップが生まれ事実がついて
ゴシップも流れスターの浮き沈み
ゴシップをきく風とギヤラ上り
ゴシップになつて新人嬉しがり
ゴシップを妻はフンと馴れたら
ゴシップへ三面鏡は知らぬ顔
近所へは夫のゴシップ自慢なり
ゴシップと片付けられんことに
ゴシップの聞けばたわいもない話
九分九厘まで真実聞いていた噂
噂にもならぬ娘いちばん先に嫁き
ゴシップになる頃既に別居中
ゴシップの主人公がきた更衣室
ゴシップになつて議会の幕が降り
ゴシップのそれから裏目出る人生
埋め草にゴシップ二度の務めする

杜太 軒子 芳朗 あいき 滋雀 文秋 花村 圭井堂 静歩 弓彦 好郎 銚児 笑馬 形水 笑痴 天樹 花村

玉造川柳会
九月十一日(月)午後六時
荒々しいやりて静
玉造交差点南一〇〇米
大阪信用金庫

所題時
堺川柳会
九月廿三日午後六時
内容・灰皿・有頂天
堺市九間町山ノ口筋
但阪和線神明町電停東
八木摩天郎居

— 52 —

創立40周年 記念川柳大会 尼緑之助還暦

日時 昭和42年10月15日(日曜) 正午
会場 出雲市北本町 出雲市体育館
兼題 流行(大阪) 清水 白柳氏選
スケール(岡山) 浜田久米雄氏選
続 く(藤山) 小西 無鬼氏選
追 憶(鳥取) 大西 八歩氏選
耳 (松江) 柴田 午朗氏選
大 安本会代表尼 緑之助還

○各題三句宛

○投句のみの方は各題別紙、住所氏名
明記

投句料百円添付のこと(切手15円7
枚可)

記念会報呈、投句は10月10日まで
宛先 出雲市今市町鑑町 王 紫

○大会々費 300 円(記念品、会報、
写真呈)

○席題若干当日発表 ○兼席題共選者
色紙、短冊等優秀作品に贈呈

○午後4時半より記念懇親会
(会費300円)

主催 出雲市教育委員会
いずも川柳会

後援 島根新聞その他

その次はどこを出す気である水着
金鎧の水着臍まで濡れただけ
水着着て泳ぐ気のない二人連れ
迷い児のママを水着の色で呼び
サンオイル塗って水着は灼いた
裸かと思う水着へ眼をそらす
一昔前の水着で娘と泳ぎ
十代の水着より食べよく笑い
父ちゃんをあっち向かち着る水着
水着きた娘を女として眺め

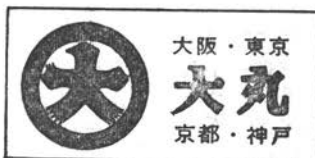
兼題「型破り」

若本多久志選

凡九郎 一吸江 笑痴 柳宏子 圭井堂 笑痴 金三 銚児 杜秋 天文 樹 形一三夫 水

生み月が迫り型破りの挙式
袈裟のまま今東光はのろけ出し
型破り流石大陸帰えりなり
尋卒の社長丸めた型破り
アイディアの名で常識を破る型
型破りピンチになると引き出され
型破り姑と一緒に住むと言う
広告でない広告で人を寄せ
インテリの頭じゃ解けぬ型破り
間違えたのを型破りさされたま
無茶苦茶な型で斬ったエキストラ
夫婦とも左で箸持つ型破り
型破りそれでも一本筋とおし
型破り虚勢とみえる点もあり
二回目も双児型破りが生まれ
読み深く計算された型破り
三りんばに限りゆつくり式を挙げ

お買物は 4都を結ぶ 大丸へ!



銚児 吸風 薫風 喜柳 白柳 野迷路 美巳代 旅雀 旅風 圭井堂 清人 笑痴 恒明 銚児 好郎 旅風

蛙の子は蛙型破りも出てくれず
伝統を破る勇氣も要る船場
歓迎の駅ふるさととは型破り
型破り四十で孫と顔が会い
型破り阿呆やないかと噂され
型破り仏滅選んで式をあげ
型破りえたいの知れぬものを画き
遠足の列に一人の型破り
デザイン型を破るに一苦労
人生を型破りで来た胸を張り
感電死稲妻雲の上へ抜け
真夜中をがめつく稼ぎ昼眠る
型破り後姿にある孤獨
葬いの型を破れぬ村に住み
型破り同窓名簿に生き残り
▼菱田満秋氏は横浜市港北区青葉台一
五、公園住宅一号棟九〇九号へ転居。

飄太 柳宏子 笑風 銚児 白溪子 笑痴 笑風 一風 与呂志 章雅 勝晴 花村 多志 多久志

☆ 柳 界 展 望 ☆



路郎忌句会の第二会場、喜楽別館で前列左から石首根民郎・生々庵・白柳・鉄児・後列左から清人・与呂志・柳宏子・恒明諸氏。

橘高薫風担当

▼七月の路郎忌に次いで水府忌句会が八月六日(日)午後一時から島根ビル九階で開催、番傘八月特大号は岸本水府序文集を特集。
▼川柳宮城野社は浜夢助氏没後空席であった主幹の席に創刊二十周年を迎えて後藤閑人氏が就任、一層の充実を示され、全国誌上大会第十六回東北川柳大会(別項記載)などの記念事業を開催される。

▼第十五回蟹の目川柳大会は八月六日(日)正午から金沢市の玄門寺で開催。第十八回名古屋まつり協賛短詩文学祭は、作品募集作品展示会、文化講演など多彩の催の下に開催。
▼川柳ジャーナルは昭和四十二年度自選作品を募集、自選句七句を十月十五日までに静岡市両替町二丁目二の五稲村方川柳ジャーナル事務局宛、参加料三百円。

▼南大阪川柳会は八月から会場を北生野町の乗願寺に移して開催された。(二十日)
▼柳画研究会報(京都市)の柳画教室に松江梅里氏の「気の抜けたわさびのよう な好きな人」がとりあげられた。
▼俳諧かほる会創立七周年記念、小川雨後亭氏追悼句会八月十二日(土)午後三時半から東京中野の北海道拓殖銀行中野支店で開催。
▼第一回笠岡市港祭川柳大会は八月五日午後一時から笠岡市労働福祉会館で開催。服部十九平、浜田久米雄、直原七面山、本田恵二朗、木山速二ら川柳塔同人諸氏が選に当られた。
▼長崎川柳社主催の西日本川柳大会は十一月五日(日)雲仙仙民宿舎、有隣荘で開催。兼題、耶馬台国、あの人、麓、苔、有名、コース勇氣、子供唄。会費二百円(投句料も同じ)投句は長崎市茂里町一の一四二鹿角一路宛。
▼第十六回東北川柳大会(仙台市)は十月一日(日)午前十時から仙台信用金庫七階大ホールで開催。兼題女、ころころ、弱肉強食、

温泉、あっちこっち、辛うじて、新米、開く。各題二句、投句は百五十円封入の上、九月二十日までに仙台市東八番丁一七〇後藤方東北川柳大会宛。
▼備前川柳社七月うどん祭句会は十六日横山一声居で開催。
▼木村十悟氏(大阪同人)は八月二十一日、阿倍野の市民病院で食道ガンのため逝去。六十三歳。豆秋氏の片腕だった人。
▼橋本緑雨氏(大阪同人)からは「梅里さんの追悼句会とは嘘のようですね。生々庵先生、医学でなんとかならなかったのでしょうか。私は五月十二日朝四時に倒れて二時間意識不明でした。あれもこれもと男ざかりの腕をもちー(追悼句緑雨)」
▼若本多久志氏(西宮同人)は七月三十一日夫人同伴で能登半島一周のドライブ旅行を楽しまれた。半島最北端の霞ヶ浦温泉はまだラングを灯した素朴な宿で気に入った由。「万葉の史跡ゆかしき能登の旅」
▼浜田久米雄氏(岡山同人)は七月七日から十一日まで国鉄川柳人連盟の大会に出

疲れ
肩こり
食欲不振
つかれ目
神経痛に

▲
タケタ製品

アリナミンA

席、東京、日光と川柳の旅を流れた。
▼雄賀勉氏(和歌山同人)経営の魚又楼は七月一日地上五階建冷暖房完備の五十室、別棟大浴場、デラック会議室などを備えた新館完成。魚釣大会のファミリサービスなど華々しくオープンされた。
▼西田柳宏子氏(大阪同人)は七月三十一日徳島の日和佐海岸で清遊。名物の海亀の産卵を今夜は見られそうですと。「若さ一杯キャンアファイア燃えさかり」

▼川岡雲眼子氏(諫早同人)は、天満神社第四回夏季奉納川柳大会(七月二日)や文化会例会で奪斗、「同棲を許す故郷の荷が屈き」の句で特選入賞された。

▼岡崎祥月氏(松江同人)は七月の路郎忌句会に二十年振りに上阪、藤井明朗、石田清泉、堀江正朗諸氏と通天閣など大阪市を観光句会に臨まれたが、当夜の豪雨で山陰線不通となり、薫風居に一泊、路郎師が一日でも一行を大阪の地にとどめたいとのご意志であつたのでしようとの上阪をなつかしく回顧しておられる。「夫婦善哉やはり夫婦で来たい」と。

▼中村九呂平氏(下関同人)から「今度の豪雨で柳人諸兄に被害はありませんかでしたか。一杯水の同人が原千里、櫛部いさ夢阿氏が活躍しているのは嬉しいことです。」

▼田村藤波氏(岡山同人)は山陽新聞の柳壇第一席に入選された。入選句は「喪服着て妻の気品の知れるとき」

▼山田季賛氏(高槻同人)は七月十六日熱田神宮へ。中津川の夫婦石、養老の流

などを見物。七月二十三日は新見市の井倉洞へ。また八月一日から三日まで高山乗鞍山頂、上高地、焼岳と周遊、大いに旅づいておられる。「頂上で聞く雷はおもしろし」

▼桜川不水氏(下関同人)から「長い間水不足に悩んでいたのが、今度は水過剰に苦しんでいます。神様もお人が悪いですよ」

▼河本南牛史氏(松山市)は川柳雑誌終刊号までを製本にしたので書架が見違える程立派になり柳友を羨しがらせておられる由、こうしないと荒縄でくくられて安売りされてしまいますと。

▼三宅不朽氏(竹原市)から川柳たけは七月例会の寄せ書きを頂戴した。十五日旧市役所で開催されたが寄せ書きにも「たけはら」の若さが溢れている。ありがとう。

▼河相すゑ氏(西宮同人)と薫風は七月二十六日から岡橋宣介、海士大樹両氏から、乗鞍岳、平湯温泉、日本ライン、明治村を周遊、日本ライン温泉ホテルでの第三回大陸柳人同窓会に合流同人の河村日満、大山雅城の両氏や東野大八氏らと

交歓、三十日帰阪した。明治村では六十五名出席の句会の模様は三十一日付中日新聞に掲載された。

▼宮口笛生氏(奈良同人)は七月八、九日の両日東京四谷祥平館で開催された全国鉄川柳大会に出席、夜の東京の観光が素晴らしいかった。又同氏宅の電話番号が左記の通り変更になった大和郡山局〇七四三五・二六六〇七番。

▼岡本昭三氏(熊本同人)は三菱電機熊本工場へ転勤新住所は、熊本市東坪井町三九番地。

▼池田可宵氏(長崎市)は函館、室蘭、札幌、旭川等北海道一巡の旅を七月二十四日から八月二日までつづけられた。

▼川柳きやり八月号は村田周魚追悼号として充実した編集ぶりが好評。

▼東野大八氏(岐阜県)から「大陸川柳人」にすゑ、薫風両氏の参加、ありがとうございます。朝日新聞の「川柳」は「すげ笠」の有町氏の寄付で全員に配布しました。

▼岡田甫氏は鎌倉市大町四ノ四〇二七(電話・鎌倉〇四六七一三二五三九番)近世庶民文化研究所へ移転

(電話は十一月から)

▲杉本知恵さん(吹田市)は吹田市山田下二七〇へ

▲大森風来子氏(岡山県)は渡米計画書を発表。十二月十三日羽田出発。翌一月十二日羽田着の一月間、在米吟社を訪問される。

▲大井正夫氏(姫路市)が八月二日来社。大陸川柳人同窓会の盛会の模様や、あつたの柳談を三夫氏と交わされた。

▲北村三歩氏(鳥取同人)は八月四日淑恵句集「ゆかた」を持って来社。この句集の序文を河村日満氏が書いておられる。一引揚げの記念と古着すてかねて淑恵。非売品。

▲三宅不朽・瀬戸山文平両氏は路郎忌句会に出席出来た感と私信、不朽氏は「私は路郎先生が好きで好きで

でならないのです。これは理屈ではない、川柳塔によって育ってゆく幸をかみしめています。

▲水粉千翁氏(倉敷同人)は七月二日の川柳道場の懇親会の席上、グループから表彰された。

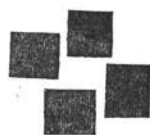
▲本多柳志氏(大阪同人)は奥能登から一旅の下駄又パチンコの方へ向き「柳志」

▲米沢曉明氏(大宮市)から「水郷川柳社主催の愛媛県夏の川柳大会が八月六日大洲神社で開かれたが盛会であつた。」

▲渡辺曉童氏(愛媛同人)は八月二日三日長崎市での全国市町村教育長研修会、中国、四国、九州の会に参加、バスや船が冷房で快的な旅で川柳のネタを仕込まれたとのこと。



優雅な書き味



松江梅里追悼句会

七月二十日午後六時

会場 大 萬

弔 吟

おしまれてはたせなんだ事多し
性格のちがつてたのも憶い出や
子のほかは寝てつくると言ふ逝き
雷鳴の夜は梅里の顔が見え
天賞の短冊飾る遺墨とし
淋しさは横綱の席空いたまま
句に賭けた生命残して君は逝く
還らない別れテーパーにかよもの
水茎のあととさわやか天の川
本当はまだピンとこぬ先生の死
懸垂にあの達筆がなし追悼忌
ターミナル予約の寿司が届けられ
艶やかな話題に浄土にぎわえり
蓮の葉へ歌を書くのか一人旅
梅落ちて悲しいみちに星は降る
紅梅の散るその日まで艶やかに
散るならばサツと散りし師の如く
敵のない実行力を範として
何もかも思い当る事あり最後の日
いづれまた逢える日もあり待つて
水茎のあとと涙にかき消され
雲の峯梅里の唄が聞こえそう

緑 古 一 吸 静 阿 潮 天 静 狂 す い 芙 千 滋 薰 一 水 金 銚 文 柳
雨 方 舟 江 馬 茶 樹 花 歩 二 々 巳 葉 雀 風 客 三 児 秋 宏
子

塔までの道を教えてそれっきり
梅里師の笑顔まぶたにこびり付き
句集「兄弟」上梓待たずに逝き
塚が生んだ柳人一人早う死に
ペン重し徹夜の梅里追悼号
一三夫

★

今にも泣きだしそうな七月二十日の夕空だ
った。阿倍野区松崎町「大萬」は、思い出深
い「南大阪川柳会」のホームグラウンドであ
り、大萬川柳誕生の本拠地なのだが、きよう
松江梅里追悼句会の会場となる。

梅里さんをしのぶ六十七氏は、まだ実感の
わかぬおもいで続々出席される。

千代かけてかわらぬ松の結び文 梅里
この川柳手拭いを出席者におくられ、会場
の遺影の前で黙祷後、柳宏子氏の司会で追悼
句会がはじまる。

生々庵主幹の追憶談は、梅里氏の商才や文
才をたたえ、氏の人となりをゆくりとした
口調で語られた。主幹は最後に松江梅里氏の
奥の底の底まで静かに見つめてみると、と前
置きをして、人間梅里をつぎのようにことば
をつづけられる。

見かけは陽気に見せようと努力しながら、
どちらかと云えば無口に近い内面的で、その
心はさびしい孤独の人ではなかったか。それ
は句の上にも散見できるように思うと、梅里
氏の句をよみあげられた。

いっそ一と思いは思えど滝の音
バスが出て吸殻拾う人と知れ

泣き叫ぶ子へ罐切りの見つからず
相惚れやおまへん辛抱してまんねん

生々庵主幹の追憶談がおわると、川村好郎氏
が梅里氏未亡人と共に挨拶された。この肉身
の二氏には、みじんも暗らさがなく、来る日
も来る日もお得意先きからの注文で店は繁
盛の一途にあるという。梅里さんは安心しき
って御霊となられたのである。

好郎氏の眉宇には大萬川柳の再起と、兄弟
句集から南大阪川柳会など、梅里氏の天から
の声に「よし、まかしとけ」という兄弟愛の
決意の色を記者は感じとったことである。

テーブルコーダーに吹きこまれたありし日
の梅里氏の美声が静かに会場に流れる。ご存
じ「山中節」と「ほこりたたき」に満場耳を
かたむけた。ペランダの隅で記者は4Bを走
らせていたが、きよの曇り空からたった一
つだけ西方に星が見えた。大空を見るとこの
星一つだけである。ひよっとしたらあの星は
梅里さんではないかと思った。あの輝き、あ
の人なつっこい色、あの星はたしかに梅里さ
んであった。

(F)

出席・好郎・一三夫・笑痴・静馬・文秋・
静歩・美代子・三司・瓢太・没食子・古方・

千葉・柳宏子・白柳・潮花・天樹・一舟・滋
 雀・水客・千乃子・柳志・痴享・美巳代・薰
 風・摩太郎・一栄・舟遊・美房・葉・いさむ
 ・誓二・宣介・小松園・金三・竹荘・素郎・
 ゆきを・鉄児・形水・清人・東天紅・狂二・
 吸江・弓彦・野迷路・恵文・観岳・生々庵・
 喜風・すゝむ・博也・双葉・草春・鬼遊・恒
 明・句楽坊・有子・千梢・圭井堂・章雅・春
 星・季賛・琴女・あいさ・恭太・宏子・葉子
 ★松江家から偲び草(すし) 西尾菜氏からお
 供物(菓子)をたまわった。

席題「賭け」

海士天樹選

人生無常明日への道を賭けて生き
 たわいも賭けでもてるバーの隅
 弱そうな馬に賭けてるへそまがり
 賭け事の好きな亭主を持つ不作
 宿命とあきらめ命を賭ける職
 賭馬だんだんだんだん追い抜
 賭けごとを責める父にもあつた過去
 人生の賭けの初めの幼児展
 出世もうあきらめ若手に賭ける夢
 すがりつく思いの賭けはみな外れ
 三度目は社運賭けるへ乗ってこず
 名と命かけたザイルに身をまかせ
 賭けられていたと知るタイピスト
 国宝にされて舞台へ賭けて老い
 波しぶき男を賭けるかじを取り
 乗るか反るか最後の賭け首を吊り
 運命を賭けて生む気の丙午
 積乱雲孤独の賭けを見てござる
 欲の瞳が火花を散らす賭け一つ

生々庵 弓彦 静馬 笑痴 清人 瓢太 いさむ 千葉 清人 柳宏子 一三夫 美代子 素郎 潮花 一栄 芙巳代 静歩 野迷路

誘惑に負け一生を賭けてみる
 賭けて賭けて人間無心になりき
 のれんまで賭けて約束手形切る
 おさなまで賭けた希望の裁ち鋏
 博士までとり人妻に命賭け
 一滴の思想に賭けるのも男
 人生を賭ける男の眼とおもう
 剝製の軍鶏賭けられてゐる姿勢

席題「内助」

岡橋宣介選

内助の功たたえた明治遠くなり
 ハイハイと聞いて連れ添う五十年
 成功をすれば内助の功も言い
 愛すればこそ内助と思つてず
 内助と見る内助は俺だけ知
 女丈夫と言われ内助を忘れかけ
 口に出せば内助光らぬものになり
 内助を横から見れば仲のよき
 恐妻の口蔭と言ふは第三者
 口におこさぬ内助ありがたし
 内助の功すぎて選挙違反の一步前
 事金に関し内助は口にせず
 順風満帆かげの力と言わしとく
 内助の功とはひとがいうてくれ
 ほんとうの内助の功は他人知らず
 惚れていたからつくしたのが内助
 定年退職内助ねざらう旅に出る
 内助ではない黙々と五十年
 インタービュに内助おぼるばかり
 内助の主はだまてうつつわいて
 妻なればこそ吐息をひそかにす

滋雀 静歩 弓彦 美代子 一栄 舟遊 天樹 双葉 柳宏子 文秋 好郎 生々庵 吸江 芙巳代 観岳 笑痴 一栄 潮花 水客 古方 好文 柳秋 一栄 形水 小松園 宣介

兼題「寿司」

金井文秋選

千瓢は嫌いお寿司に穴をあけ
 代替り砂糖のきいた寿司となり
 寿司の箱昨夜の客の筋が知れ
 ささびに高い安いながら寿司つまむ
 魚偏を当て合いながら寿司つまむ
 素人のすしは器にうず高し
 バツテラに又やられまジンマシン
 寿司の味おやじの味が店の味
 遠足のパン煮やまし寿司屋の子
 すし握る手に根性をひめている
 不意の客すし来るまで茶でつなぎ
 江戸前の寿司を浪速の味で売り
 おふくろの味は寿司屋にまじらし
 通ぶつた客をすしやはうまく御し
 高いのは覚悟にぎりの時価を食い
 わさび抜きににぎりも子供連れ
 女連れやつと決った盛り合せ

芳子 花村 千葉 圭井堂 小松園 曉年 旅風 水客 好郎 柳志 鬼遊 好郎 好郎

黄銅六角ボルトナット
 及び特殊換物全般

合資会社 西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地
 TEL 760 三四五二一四
 夜間 762 四四〇八

満ちたりた顔でアベック寿司を、夜伽すし故人の癖で食べて見せアベックへ寿司屋の威勢こそばし蒸し寿司の湯気はお客を誘いこみしやり握る暇がない程うまい寿司折伏に來たとは知らず寿司を取り看板の五十円ずしは数がへり銃火巻サビき過ぎて呑み下し寿司一つまんて彼をソツと見る常連へネタを問わずににぎる寿司七三に傾く寿司の折を提げ注文の寿司を寿司やはツンとおくすしのこがあり素人にすしの味

兼題「兄弟」

菊沢小松園選

兄が来て弟が来て酒になり兄弟の癖がよく似てくるも年兄弟の味も還暦すぎてから兄弟が揃って嬉しい酒となり二号との別れを弟にまかせときチャンネルへ兄弟別な趣味を持ち早よ兄貴もらえと弟せくらしい兄ちゃんがあるからセコを着る弟へ一步譲った仲の良さ地味過ぎた姉の形見がよく似合い弟を立ててますます光る兄兄弟無口の底で信じ合いい兄思ひ弟思ひでうらやまれ内いひがんで外いひ貴の肩を持ち兄弟と思う自信の平手打ち弟の会社で庶務のイスにいる

柳宏子
小松園
美巳代
井平
金三
痴亭
観伍
与呂志
与呂志
一栄
齊花
美代子
文秋

正朗
芳子
阿茶
美代子
与呂志
金三
あいき
東天紅
形水
誓二
旅々庵
生風
鬼遊
金三
笑痴
一三夫

兼題「かくし芸」

西尾

アリバイをしい兄弟つづがなし兄弟のよき親死んでから分かりさてこれが血かとも思ふかばいよう弟に掌を合わしる不在合せ還暦を迎えた弟まだかばい金の要ることへ兄弟仲がよし貫録が違い兄弟かとうたがわれ双児でも縁談だけはままならず兄弟の合格兄が見て戻り兄弟のたがいがに城を大事なり弟をはげます兄の声となり

好梢郎
千きを
宣介
一舟
水客
いさむ
圭井堂
柳遊
舟遊
舟遊
葉選
芳子
正朗
与呂志
柳宏子
惠文
祥月
静歩
鏡児
笑痴
あいき
没食子
瓢太
どんたく
素郎
狂二
狂彦
潮花

かくし芸昔番頭の紀いの国素人くさいと何が何とも言えぬ芸女房の前ではやれぬかくし芸袴扇みなご持参のかくし芸かくし芸のどをいためてい。言うかくし芸それではという顔になりかくし芸順番が来て立つ便所かくし芸出る頃芸者の時間切れ録音で偲ぶ故人のかくし芸かくし芸親を泣かせた声を出し小道具も揃えてあったかくし芸早よすんでよろしおまたかくし芸評判で女将も見に来るかくし芸あらためて前歴聞かれるかくし芸三味線が泣かされているかくし芸総務課にいてプロ並みのかくし芸かくし芸幹事がやって飯にするジュース飲んで座を食うかくし芸末席へ行くほど粋なかくし芸かくし芸左遷の人と思われず

三司
すゝむ
静馬
吸江
博也
摩天郎
双楽
竹莊
恒明
頂留子
美巳代
鬼遊
阿茶
花村
花梢
白柳
好郎
一三夫
一三夫
水客

時	題	所
南大阪川柳会		
九月二十日(水)午後六時		
シルエット・指・カマトト・動く		
北生野町一丁目		
乗願寺		
環状線寺田町北へ四百米		
国分通りを東二百米		

真実に

かなしい

岡橋 宣介

松江梅里さんのお名前は古くから存じていたが、親しく近づきになったのは、十九年前の昭和二十四年秋に発足した。大阪市文化祭・市民川柳大会以来で、殊に昭和二十八年第五回目にせんば川柳社が当番になったとき、大会プログラムの大ビラの執筆を梅里さんにたのみ、達筆をふるって貰ってうれしかったことが印象にふかい。それから十二年後の三十九年一月二十六日わがせんば川柳社同人の新年宴会を大萬(梅里さんのお宅)でお世話になったことも忘れられない。

更にいっそう親しさを増したのは、何と云っても「川柳雑誌」が「川柳塔」に改組されて以来であろう。梅里さんが主柱となっていていられた「南大阪川柳会―大萬川柳会」の句会場が、わたしの家から十五分くらいで行ける松崎町のお家であったのと、いささかも邪心のない、見るからに温和な人情篤く世話好きで、根っからの円満な梅里さんのお人からに惹かされて、偏廬者のわたしは月の二十日には、しげしげと通うようになった。なまけ薄い人の世に、つい先ごろの四月二

十日夜の須崎豆秋七回忌追悼句会で、故豆秋を偲ぶ梅里さんの手厚い御供養に涙がこぼれた。越えて五月二十一日の奈良公園吟行―依水園での句会に、和やかな一日を過ぎたのもきのうのことのようで記憶に生々しい。そのときのわたしの撮った梅里さんの最後の写真が、机の上ではほえんでいる。わたしはそれを今ながめている。

その次の六月二十日の大萬句会では、遂に梅里さんとの最後の訣けになろうとは、いまだにほんとうのような気がしない。それから八日後に柳宏子、薫風さんからの計報にわが耳を疑って、何べんも聞き返したが、梅里さんの亡くなられた事実をどうすることも出来なかった。もう二度とこの世で元気なあの温顔に会えない。これからというのに、何うして神はわたしたちから善き人を、突如奪い去ったのであろうか。無常というもおそろかと思えど、たまたまなく腹立たしく、真実になんし

梅里脱出の遺句

海士 天樹

むつかしい詩論や、文学論はわからないが梅里川柳がどう脱出しているかを八月号の白柳抄出の中から作品を挙げてみよう。命まで賭けた女でこれかいな

相惚れやおまへん辛抱してまんねん
悪友にしたりされたらうまが合い
大仏さん一べん佇ってみたかるう
殺されて雲を見上げるエキストラ

栄冠へ内助の功は忘れまい
世界中かけがえのない好きになひと
ブラカード鰻の匂う橋に佇ち
傷ついた雀施設の子に飼われ

明治百年この還暦に湧く斗志
あなたと呼んでは霧の夜だった
花街の娘といわれたくない嫉け
略式を嘆く古老の座りたこ

独りもの宵から雨の音と寝る
国なまり磯の匂いの中で聞き
このように分けてみると、白柳抄出の中に

正、反、合の矛盾が認められ、絶えず脱皮への努力を払われていたことが歴然として、彼はマンネリ化した川柳から脱出すべく、余生を賭けて各地柳界に進出したいファイトを燃やしていたに違いない。

8月号松江梅里遺句(五句)

恵まれぬ過去が苦難に耐えてくれ
じつくりと泣くまで待とう野心持ち
考慮しておくも既決の函へ没
客足をとめるネオンへ宵の雨
おしのびで立ち寄る星のきれい夜

この五句から出発する、梅里の川柳への執念は、素晴らしく発展することを約束されていたことであろう。

合掌



▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。

金井文秋担当

玉造川柳会（大阪市）

西出一栄報

苗代へつばめ楽しく宙返り障子紙にあらわして買うてくる書留に郵便受は無視される今日も来なんだ郵便受は無表情二次会が土産の予算ぶちこわし角ばった宛名彼氏とすぐ判り小包の宛名なつかし母の文字都合よく宛名の文に道を聞きおぼろげな宛名の文字で安着し郵便屋泣かして草書やと着き岩清水ハンター一息する所バサバサいなる茶屋で汗を入れ一服をせよと土工へ銀の雨共稼ぎ休日さえもいぢがいの子の咳へ休診の札風に揺れ休ませて欲しい電話へ咳も入れ鉢巻は伊達にはしない気合術香具師ある日気合大きく客を寄せ負け癖がついて気合も空廻り気合入れたら人権がどうのこの綱引きの気合一つになる力

季三賛 金三賛 文秋方 古司 寿美司 照一舟 千葉菜 句念坊 滋雀 中性尼 静馬 竜馬 章雅 美房 風洞 井平 柳宏子 榮

備前川柳社

横山一声報

裾分けのような予算がもの足らず郷土料理上手にできてお裾分け裾分けの品潮の香があたりらしい欲張りも裾分けですよと少し出しお隣りも裾分けらしいお裾分け裾分けを小さく割った多人数末席へ行きわたらないお裾分け裾分けをまた裾分けして呉れる友釣って来た魚を配って自慢する前掛けで受けたあられのお裾わけ裾わけの中すらの平からこぼれお裾わけですとエプロンから出たお裾わけのえびで大きな鯛が釣れ裾分けのえびで大きな鯛が釣れ裾分けのえびで大きな鯛が釣れ裾分けのえびで大きな鯛が釣れ裾分けのえびで大きな鯛が釣れ

和気川柳会

藤原秋月報

風紋の砂丘に思い出を埋めよい相手選んで砂もビルになる猫はもう砂のありかを知っており日本は狭し砂丘にまで挑み待つ身にもどなりたくなる終列車終列車女の酔うたのも終列車言訳を考えている終列車いさかいのあげくに乘った終列車終列車で口実自問自答する磨き砂たっぷり男の皿洗う夕焼けへポツンと残る砂の山

岡鉄川柳句会

藤原秋月報

納得をしたか女の苦笑い何の字かわからぬサイン大事がり

久米雄 鮫虎狼 久米雄 秋月仙 柳坊子 正洲風 胡正洲風 浄声美 英久野 伊天野 卓美人 草平 文美人 草平

三味線の師匠に残る化粧焼酎納得に漕ぎつけたので酔いつぶれ細腕で家計を補う手内職落書きのようなサインで知らせる追加する銚子サインで知らせる来ノサインミス続出の草野球鈍感な男へサインの念を押して売れた子のタレントサインを顔にバカばかりに納得出来ぬ顔耳の穴搔けばサインと間違われ目のサインいつものことと言え仲人が納得させるスキヤンダル夏期手当家計を潤すほどは出ず家計簿をおとして主見つめられデートするサインへ目目が答え

高知川柳社（高知市）

川竹松風報

独り言うっかかり言えぬ嫁の耳大トラの誰にささやく独り言失意の夜酒がいわせる独り言人形へかわいママの独り言病人の気分は猫へもの言を言哀歓がネオンの陰でうずをまき草冠を除けても陰のある字なりビルの陰女誰かを待つ素振り同情に甘えやっぱり陰の花その人が来て陰口へふたをする首愛が日陰の花にしてしまいくっそりと陰でもらえる祖母がなんとなく陰がありそで飛びこぎ軒先を借りる商魂に学ばされ金のない休みひびける気になれずソロバンを妻がひげば愚痴に赤ちゃんの気嫌を直す天花粉オフィスの不満トイレへ捨て行き

胡路風 照郎友 柳五郎 田月 秋子 弥寿 幽谷 太峰 草平 訓平 文平 三平

夕日の中に横たわっていた不貞

どんぐり川柳会 (羽曳野市) 川村好郎報

アパートは笑い声にも気をつかい
笑われた過去が土台の立志伝
評判に驕らず謙虚に徳を積み
評判に負けて勝負に勝つ男
新案の評判としては聞いてくれ
よく話す自慢の品つてこれかい
団らんの笑いがもれるD K
必殺の指し手会心の笑みとなり
笑うたはるお見合いまういった
人知れず儲けて笑い止まらな
笑う日が来ると信じて我慢する
笑いとパチリ撮ったがピントば
け斗病を耐えて笑える今日となり
一目惚れ笑えば素敵な片えく
嫌な見合い膝も崩せず笑い顔
運命だと笑って別れたひとなの
に遠にいつまで見せる笑顔やら
ライバルへ笑ってゆづった片想
いとなく腹にいちもつある笑い
何となく腹にいちもつある笑い
容疑者の不敵な笑いへカメラ班
よく笑うあの娘も術後か目で笑
評判の診たて患者が列をなし
レッテルも評判もよく売れ残り
評判の高いシーン映倫カットす
評判を気にして嫁ぐ売れ残り
評判を気にして悪いコンデショ
ン評判を聞くたび未練また募る
評判を鶴呑みにして買いかぶり
やりくりも過去なれば笑い合い

あすなる川柳会 (大阪市) 川村好郎報

紅雨 武坊文 茶玄 幽春 秋重 稔峯 青吉 啓郎 八竜 比呂路 浩平 都花 梅歩 一里 安秀 万成 輝水 秋成 高嶺 信人 正次 聖代 昭美 梅あきら 好里

要点をばかして肚を探り合い
要点にふれて商談行き詰り
顔振れを見て女房と交じり
妻の手も真似た娘の熱秘権
セールの自信ゆつくり茶をよ
再選はさまたげなしの顔ばかり
数字より勘で社長は叱りつけ

まるべに川柳会 (大阪市) 川村好郎報

汗握る興奮ハンカチ忘れさせ
時々はすねて気持をたしかめる
すねた顔鏡の前で直して来
ころえと涙へハンカチ間に合
梅雨が来ず木のチャンス忘れ
洗濯機一ベン休みたい日照り

むらくも川柳会 (島根県) 藤井明朗報

学生らしいミニスカートの丸い膝
巫女の舞うしあわせの鈴神楽殿
父の背に神楽見物ねてしま
うぬばれをミニスカートが笑
お料理が箸から逃げるエトラン
ゼ人生の旅へ神楽で送り出し
野良の手と思えぬ姿態の神楽舞
不快指数あがり風鈴けだるそう
三度目はミニスカートで逢うア
ート

ウィロー社 (ハワイ) 築山快夢起報

真心の探り合いする生さぬ仲
真心も世間は生さぬ仲で見る
親切が過ぎて真心疑われ
真心をつなぎつないで共白髪
真心をこめた料理をほめせず
それぞれの真心千人針に込め
色眼鏡かけて真心野心と見

百酒 ゆき彦 素郎 慶之助 好里

泉睦 瓢斗 美幸 幸子

清郎 明子 加白 芳子 孝華 正一郎 祥月

快夢起 柳夢起 浅太 蒼蛇樓 浮山 紅溪

花嫁の真心一家に灯がともり
口数が多いで真心疑われ
真心をこめた弱味につけこま
かたくなも相手の真心には勝
論されて親の真心子に通じ
真心にふれていじけた気も直
さりげなく云えば真心ない云
親に出ぬ真心かたく手を握り
真心は一羽一羽の千羽鶴
真心が知りたいいやな酒を飲み

南海電鉄川柳会 (大阪市) 辻圭水報

証明書人より先きに物を云い
身分証明肚の立つ時出して見
金三

西日本川柳大会 (第19回)

とき 昭和42年9月10日(午前9時)
ところ 岡山県久米郡久米南町・誕生寺
バス 誕生寺口下車徒歩10分・中鉄
兼題 ドライブ・宿命・首・親心・刺
未発表、既発表を問わず3句。
原稿用紙に住所・氏名・雅号明記
選者 川柳塔社から若本多志・浜野
奇童・河村日満・山内静水諸氏。
宿泊 一泊二食八〇〇円・8月末日
申込み

会費 三五〇円(昼食代・句集・発表
誌)

投句先 一五〇円(発表誌送料共)
9月5日必着(20cm・4cm句箋)
で岡山県久米郡久米南町

弓削川柳社

— 62 —

— 63 —

— 64 —

〈朝鮮人蔘〉の効用



二千年以上

の伝統をもつ朝鮮人蔘が

この宇宙時代に

すぐれた薬として欧米でも

再認識されています

〈ヒヤク〉は

この朝鮮人蔘の

有効成分をそっくり

高濃度抽出した

現代人の薬です



高濃度抽出〈朝鮮人蔘〉製剤

ヒヤク

カプセル

急告！大萬川柳復活！ ご注意に応え白柳選で再開

題「復活」締切九月二十日・発表十一月号（詳細次号）

投句先 大阪府高石市高師浜三丁目五番一六号

川村好郎

びたい。

★またスペーススマヒで原稿がたまつてしまつた。富士野鞍馬先生のが三回分、それと阿達義雄先生からも好読もののをいただきながら発表できなかつた。

★いよいよ十月号で本年度の路路賞と川柳塔賞がきまる。内外から注目されているだけに選考委員も慎重である。
(不二田一三夫)

・2DK・

定価 百二十円（送料六円）

半年分 七百五十円（送料共）

一年分 千四百四十円（送料共）

昭和四十二年八月二十五日印刷
昭和四十二年九月一日発行

編集者 大原市南区緑谷仲之町（番地）

発行人 中島蓬太郎

印刷所 大陽印刷株式会社

発行所 川柳塔社

電話大阪・二七一一三九八番
横濱口座大阪・三三二六八番

★霞乃先生の「豆秋さんを悼む」のなかに「河豚食うて別れを告げに來たも君」という句がある。これは、ある夜ふけ、突然豆秋さんが不朽洞を訪れ、路郎先生の就寝中をたたき起こしたことがあつた。「どうした、今ごろ？」
「ブグをたばまして、ほな急にかからだの調子がおかしいなりましてナ、こらひよつとしたら今夜あたりあかんと思いましたんで、もう一べん先生にお会いしてから死のうとえらいおそそ起こしましてすんまへん」
★すこし増刷したので豆秋フアンへ本号をご紹介ください★暑がり屋さんの霞乃先生から「暑さにくうだつています。雑誌も毎年夏の句は一般に出来がわるいようですが、緑雨さんをまねて、私の日頃のあゆみを記録する意味から、何句かの発表を義務つけようと思つています」というおたよりをいただいた。この意気を学

黒潮おどる 紀州路へ



＜白浜ゆき＞ なんば発時刻

急行 第2きのくに…(毎日)…12時45分発

急行 南紀3号…(毎日)…16時38分発

急行 臨時しらはま…(土曜)…13時10分発

＜新宮ゆき＞ なんば発時刻

急行 南紀1号…(毎日)…7時45分発

夜行直通列車…(毎日)…22時09分発

●第2きのくに号は座席指定券を 他の列車
は座席整理券を1週間前から発売いたします

お問い合わせ・南海交通社
(641) 8686 (341) 5038

南海電車

料理も電話も

551

ここがいちばん

TEL (641) 551-2

広東料理・焼餃子

豚饅 蓬萊 焼売

大阪 なんば

◆出張販売店◆

なんば高島屋／心齋橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋
堂島地下センター・弁天阜頭支店／中之島サン・ストアー